

米沢市築沢の昔話

編 武 田 正

米沢市築沢の昔話

編 武 田 正

米沢市梁沢の昔話

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
瓜姫子	瓜姫子	猿賀	四枚のお札	狐むかし	化物ばなし	空寺の化けもの	食わず女房	牛方と山姥	いたちとねずみの寄合田	猿蟹合戦	猿と蛙の寄合餅	猿と蛙の寄合餅	かおすと狐	オタタカ鳥
五二	五〇	四八	三九	三一	三〇	二七	二五	二〇	一八	一六	一四	九	六	五
30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
南の山の馬鹿聲	南の山の馬鹿聲	粗こつ者	和尚と小僧	和尚と小僧（小僧殺し）	鼻高小槌	金たれ地藏	猿地藏	猿地藏	笠地藏	鳥吞爺	くいごこむかし	お糸唐米	糠福と米福	鶴女房
一〇四	一〇〇	九八	九四	九三	九〇	八九	八七	八二	七八	七〇	六四	六一	五九	五六

38	37	36	35	34	33	32	31
茗荷	母ガニと子ガニ	聶と嫁	梅干	わざわい	倒れ剥ぎ右エ門	屁たれ嫁	馬鹿聶

一二六	一二五	一二三	一二〇	一一九	一二七	一二二	一〇七
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

あとがき	わらべ唄	42 恐つかなくておかしくて あわれな話	41 果てなし話	40 果てなしむかし	39 はなし
------	------	-------------------------	----------	------------	--------

一三八	一三四	一三三	一三二	一二九	一二八
-----	-----	-----	-----	-----	-----

- 一、配列は関敬吾「日本昔話集成」を参考とした。
- 二、記述はテープにとつたものを翻字したもの。
- 三、一部くりかえしなどは原文をそこなうことがない範囲で省略したものもある。
- 四、文責は全て編者にあります。

1 オタタカ鳥

オタタカ鳥さあ、兄弟二人暮ししていったもんだな。そしてある時、兄は山さ行つて山芋掘つてきた。そして山芋掘つて来て、煮て食つたんだな。そうすつど舎弟しやていなる者は、ろくでもない者だったべな。

「いや、とてもうまいもんだ、兄あ、おれにこのようなうまいどこ食わせつこんだら、兄あ何ほどうまいどこ食つてつか知んね」

こう言うごんで、兄を腑分ふわけしてみたら、兄あ山芋のあつ、首くびいつそう食つてで、舎弟にうまいどこのええどこばり食せつたんだど。ほだからオタタカ鳥はその罰で八千八声鳴かねど、餌ものさありつかんねんだど。

(遠藤富雄)

2 かおすと狐

かおすは雑魚いっぱい獲^とつて来て、そして煮て食うべと思つていたどこさ、狐あその匂い嗅^かぎつけて行つたど。ほして、

「かおす、かおす、何しつた」

「まず、寄れ。雑魚いっぱいとつて来て、煮て食うどこだ」

ほうして御馳走なつたど。ほしてかおすはいっぱい食つてるもんだから、骨など頭などは残して、身のどこばっかり食うげんども、狐は骨でも頭でもガリガリガリガリみな食うていうんだ。

「そのように、骨など頭など食うことない、んねが」
「言うど、「もつたいないから…」」

「そんなもの、なんぼでも取れるもんだもの」
ほうしたら、

「いや、なじよして獲つたもんだ」

いつも、ろくでない狐だから、一つ騙だましてやろうと思って、

「ああ、こんなもの簡単だ。夜、宮下の裏の池さ行つて、ほうして、なるべく寒い晩のがんが凍しみる晩に、尻尾入つで置け、そうすつど尻尾さ雑魚あみな食い付つから、朝げそいつ引張り上げて来ればええ」

「ああ、ええこと聞いた」

と思つて、待ち構えつたところあ、寒い寒い晩で、「いや、今夜だらええ」と思つて、入り込んでいたど。ほうしたら、段々尻尾引張らつて来た。

「よつぽど食くつついたな」

と思つたげんど、欲ふかいもんだから、いまチイト、いまチイトと思つて朝方まで尻尾ぶつ込んでいて、いよいよ今度夜明けつど悪わるれと思つて、引張つてみた。取つて来こね。

「はあ、糞！こんどはいっぱいかかったぞ」

て、引張つけんども、いや、絶対とつて来ねていうんだ。終おしまいにあ、尻尾抜けるくらいになった。こんどあ泣き出した。

雑魚もカジカもいらねから

尻尾ばり抜けてこい

エンヤラサ エンヤラサ

て、引張った。なんぼ引張つても取んね。「雑魚もカジカもいらねから、尻尾ばり抜けて来い、エンヤラサ、エンヤラサ」。泣き声立ててはあ、おしまいにはオンオン泣いて引張った。ほうしたらそいつあ、人間さその文句聞えないで、ギヤアギヤアて聞えたもんだから、

「そらまた、かおす来あがつたか」

と思つて行つてみたら、狐いた。尻尾凍みついて取んねぐなつて、ギヤアギヤアていたもんだから、

「この畜生、また来あがつたか」

て言うんではあ、カギやら棒やらもつて、ボガンボガン引張だがつで、とうとう殺さつてしまった。ほだから人真似して雑魚とるなんてしないごんだけど。人の家の雑魚とつて来るなんて、そういうことしないごんだけど。どろびん。

3 猿と蛙の寄合餅

むかしあつたけど。向いの山の猿あ、まいど蛙かえるのどいさ来て、

「蛙、蛙、あそこの部落の宮下さんの家で大宮講のお年越しで餅搗きすつから、その餅盗んで来て食うべ」

て言うたら、蛙あ、

「もし、見つかつて追っかけらつたら、おら走らんなくて、すぐ捕まっから、そがなことは、おら、はまらんね」

て言うたど。そしたらば猿あ、

「そがなことは心配すんな。今は餅搗けた頃に見て、お前は宮下さんどこの裏の池さ、土手の上からジャポンと飛び込んで、大声で、オギャオギャて赤ん坊の泣

き真似すれば、それでええんだ。そうすつど、おぼこあ池さ入ったと思つて、みんな外さ飛び出すから、そんな時、おれあ餅盗んで来っから、お前知しやんぷりして後から川向いさ来ればそれでええんだ。おれあ川向いの太い木の下んどこで待つてつから」

と言うことに話あ決まつて、その時を待つてだど。宮下さん家では大宮講の連中あ集まつて餅搗き始まつたど。流しの方ではアンコやお雑煮作るやら、いろいろ御馳走、ゴマ餅などこさえる。いやジンダン餅こさえる。

「ほら、あんばいが出たぞ。餅あまだ搗けないなが」
て言うたら、

「もう一搗きだ、それ搗け」

て言うもんで、餅搗き唄など唄いながら、にぎやかに搗いっだど。その時、裏の蛙あ、「ほれ、今だ」とばかり、土手の上から、池の中さジャポンと飛込んで、ありだけの大声でオギャーオギャーて鳴き立てた。みんなびつくりして、

「それあ、ンボコ、池さ入ったぞ、早く早く」

て言うもんで、一人残らず裏口から外さ飛び出してしまった。なんぼ池探してみても見つかんね。その間に猿あ来て、臼がらみ餅背負って、でんでんと逃げて行った。裏の池ではみんなで池かき廻していたら、岸の方から蛙あピッタンコピッタンコと這い上って行った。

「なんだ、蛙でないか、ただ蛙にだまさつだんだ。早く餅食うべぞ」

て言うて、来てみれば餅は臼がらみなくなっていたんだ。みな魂消てしまつて、「なじよすっこんだ」て、大騒ぎになった。猿は川向いの太い木の下さ餅いっぱい入った臼置いて、蛙んどこ待つてだど。蛙はピッタンコピッタンコと跳ねて行つて、

「おら、腹へつたから、早く餅分けて食うべ」

て言うたら、猿あ、

「ただ分けて食つたんだら面白くないから、この臼、山の上からぶんまくつて、早く拾つた者の分にすんべ」

「おら、走らんねから、そんなことしねえで半分ずつ分けて食うべ」

て言うげんども、猿は聞かないでどんどん山の上さ背負い上げて行つてしまつた。仕方ないから蛙はその後、ピッタンコピッタンコと追いかけて行つた。登つて行つてみれば猿は、

「ええか、まくんぞ」

「待つてろ、まず。一服つけろ」

て言うげんども、聞くもんでない。

「ええか、まくんぞ。一、二、三」

て言うど、まぐつてやった。臼は大した勢いでカラカラ、カラカラと山のでつぺんから、まぐつで行つた。さあ、猿あその臼と一緒に走つたの何のて、それこそ臼さ一緒に走つて行つてしまつた。蛙はなんぼ走つたつて、あの通りの蛙だから、ピッタンコピッタンコと、それでも一生懸命後から降りて行つて、ちよいと脇見たれば木の根っこさ餅あ臼からすつかり吹つ飛んで引つかかつていた。いや、蛙は喜んだ、喜んだ。こいつあおれのもんだぞ。て言いながら、腹へつたから、その餅、片っ端から食つてだど。猿は臼よりちよえつと早く行つて、まぐつ

で来た曰見たば、中からつぽだ。さあがっかりした。またガサガサと大汗で山に登って行つた。そうして行つてみたら、蛙は餅拾つて、

「ああ、うまい、うまい」

て食つてたど。猿は泣き出してしまつたど。

「蛙、おれさも餅ちいと分けて呉ろ」

蛙は仕方ないから、土喰付いっだどこ切つて、「ほれ、食え」

「そげな意地悪れことしねでもつと柔やうこいど呉れんだ。たのむ」

て言うもんだから、

「んじゃ、そら」

て言うもんで、中の方のやつこいどこ千切つて投なつてやつたれば、猿の顔面つらの

真中さぶつつかつて、猿の顔さピタン。

「あつい、あつい、あつい」

て言うもんで、剥はがすげんど、なかなかくついで取つて来ね。ほんでもはがし

て食つた。その後あ、みな火傷やけどではあ真赤になつてしまつた。んで、今もつて猿

の顔真赤だ。餅ぶつつけらっじや跡だど。こんどは、

「いまちいと、そんなことしないで呉れんだ」

て言うから、ぐらり後向いた。そうしたらば、こんど猿の尻さくつついた。そうしたら、「あつい、あつい」て、そいつはがして、猿の尻は真赤に火傷したど。ほんで今で猿の尻と猿の顔面真赤なのは、そのせいだど。どろびんさんすけ。

(宮下 昇)

4 猿と蛙の寄合餅

どこかで餅搗く段取りの日あったそうだ。そうしたところあ、猿の子分の方、「どこそこで餅搗くど、あいつ、なじよがして食う工面しろ」

て、猿あ一人、口たった。そしたらちようど脇に池あったそうだ。池にいた蛙あ、ひよこんと浮き上がって、池の縁ふちのへりさ、ちゃんと上がって、猿あ一人言語つ

ていたどこさ出てきたど。そうすつど蛙は、

「そげなことあ雑作ね。んじゃ、これからその餅食う段取りすんべ」

て言うたわけだ。そうしたところあ、

「おれあ、池端でおぼこの真似すつから、その隙に猿あ臼背負つて行げ」

こう言うごんで、蛙と猿あ約束したわけだ。そうすつど池端に居て、ギヤフギヤフ、ギヤフギヤフていうもんで、池さ入って、オフギヤて、まったりして、

「ほれ、おぼこ入った」

て言うわけで、家中みな出て行つて餅搗きなど、がつてにしないで出て行つてしまった。その間に猿あ臼がらみ背負つて山さ逃げて行つたわけだ。そして山の上さ行つて猿はどっこいしょと、まず降ろしたわけだ。そうしたところが、臼だから大人しくしていねで、山の嶺からゴロンゴロンゴロン。餅はあっちさふつき、こっちさふつきした。

そうすつど蛙は追かけて行つて臼あ転んで行つた後、あっちさふつついていっど拾い食い、こっち拾つて食いして、蛙は後始末して降りて来たところあ、猿は

欲ふかいから、びんびんと追っかけて、臼さ喰つつけたな食うべししたところが
熱い熱いしていたときに焼けたど。んだから顔面と尻焼けて赤いんだど。どろびん。

(遠藤富雄)

5 猿 蟹 合 戦

むかしあつたけど。

蟹がヤキメシ拾った。猿は柿の種拾ったど。猿はそのヤキメシ食^くたいから、取
換えろて取換えたど。そして蟹が柿の種蒔いたもな。

早く生^おえろ 生^おえざらハサミ切る

て言うて、生えてからは、

ならざら ハサミ切る

て言うたど。そしたば実^なったもな。そうすつど、実^なったげんども蟹はもが

ねでいたど。そこさ猿あ来たもなあ。蟹は横這いで柿のぐるりばかりいたわけだ。

「蟹どの、蟹どの、何してござった」

て来た。

「お前にもらった柿の種が芽出て、こだい、いっぱい柿実^なった」

て言うた。そうすつど猿は賢いから、色のついた赤いのなの、うまいな皆自分食って、青いのみなぶつつけた。そしたら親蟹の甲羅さぶつつかつて死んで、蟹の子出たごんだど。子蟹が泣いったら、いろいろ来た。手助けに来た栗は火所^{ほじ}さ入って待つてだ。蜂は水甕、臼は天井さ、牛の糞は戸口さ隠つていた。猿が来て火所掘つど栗はじけたので、熱い熱いて火傷して、冷やしさ、水甕さ行ぐど、蜂に刺さつた。逃げ出すどて、戸の口さ行くと牛の糞さすべつて転んで、臼からつぶさつたど。どろびん。

(鈴木ともよ)

6 たちとねずみの寄合田

むかしあつたけど。たち、せんだん川原さ栗蒔いたど。そして大抵実った頃だと思つて鎌と莫産と荷繩と背負つて行つたら、一本もないど。ほうして、誰取つたべなあと思つて、こんど帰りにがっかりして来たところあ、鳥飛んで来たど。

からすどの からすどの

せんだん川原さ栗蒔いたキチキチ

お取りやったか

お盗みやんねか キチキチ

「おれあ、そだなもの盗みも刈りもしない、カアカア」

て飛んで行つた。「はて、困つたなあ」と思つてたら、犬あ来た。

犬どの 犬どの

せんだん川原さ栗蒔いたキチキチ

お取りやったか 盗みやんねか キチキチ

「おらあ、そんなもの盗みも刈りもしない、ワンワンワン」

て行ってしまった。雀も来る、カケスも来る、そしておしまいにねずみ来た。

ねずみどの　ねずみどの

せんだん川原さ　栗蒔いたキチキチ

お取りやったか　盗みやんねか　キチキチ

「おらあ、そんなもの盗みも刈りもしない、チュウチュウ、チュウ」

て、孔さヒヨロつと入って行つたど。

「おつか、おつか、ゆんべなの栗餅残らないか」

て来た。

「そげなものの、ゆんべな、皆食ってしまったもの、ないべちや」

て言うた。こいつあ盗んだなと思つて、こんど孔さくぐつて行つて、ねずみ皆殺しにした。今でも、いたちにかかっどねずみ、ひとたまりもなく食^かつでしまふ。人のもの盗んだりを決してするもんでないぞ。どろびん。

(宮下　昇)

7 牛方と山姥

空屋があつたから、魚売り泊まつた。魚売りは売れなくて売れなくて、ほうして困つて行つて小屋見つけて、そこさ泊まつていだった。そうしたところあ、

「うう、寒い寒い、さむい」

て、山姥、これは年寄つた山姥入つて来た。そして、魚いさばの匂いかいで、

「うまい匂いすんな」

て言うもんで来たて言うんだ。

「さあ、こりや大変だ、こりや」

て言うもんで、魚売りは魚箱片付けて背負つて逃げたど。そうすつどその山姥後から、

「ほの、魚売り待つてろ、どこまで逃げだて分んねぞ」

て追かけだつて。一生懸命で逃げっけんども、追つかれそうになった。こんど箱から魚一匹出して、ポエンと投なつてやつじど、そいつ、ブリブリ、ブリブリと

皮から何から、五臓から皆食つて、そのうち逃げて行くと、また追っかけて来る。いや、逃げた、逃げた逃げた。どこまで逃げても追っかけて、とうとう川端まで行つてしまった。ほれから仕方ないから、それから木さ登つて行つた。そうすつど、

「魚売り待つてろ、どっから登つて行つた」

て言うから、魚売りは、

「ああ、その藤蔓おさえて、そいつ伝わつて登つて来い」

「んじゃ、こいつかあ」

て、藤蔓おさえて、ワサリワサリと登つて来たつて。そんとき魚包丁箱の中から出して、藤蔓スパンと切つたど。ほうしたところあ、川の中さ倒さに入つて行つたど。ダボンて入つて行つてしまつたど。

「いや、そりゃよかった」

と思つて魚売りはわらわらと戻つて来て、その家さ山姥死んだもんだなと思つて、こんど二階の梁の上さあがって寝つた。ほうしたところあ、帰つて来たど。

いや、あの魚売りにかかってひどい目に会った。こんがえな貧乏クジざああったもんでない。ほうしてこんどは火焚いて、腹あぶり始めた。ほして燗鍋^{かん}かけて、そいつさドブロクいっぱいお燗して、

「お燗出るまで、どれ」背中でも焙つて火焚いて、燗鍋かけっぱなしにして眠てしまった。グウグウと眠たから、こんど屋根から青芋^{おの}殻ひん抜いて、そいつそつと下げてやって、燗鍋さ入ってツウツウ、ツウツウと、すっかり飲んでしまったど。ほうしてはあ、鍋空っぽになつてしまった。ほうしたらこんど、

「はて、お燗が出た頃だな」

ほして目覚ましてみたら空っぽだ。

「なんだ、ちよつこら眠むっているうちに、火の神さま、みな飲んでしまった。やれやれ困つたもんだ。仕方ない。酒はあと無いから、餅でも焙つて食うべ」

ほしてこんど餅出してきて、ワタシさいっぱい並べて、餅焙り始めた。ほしてまた、

「焙れるまで一眠入りすつかな」

て、眠ってしまった。温^{あつ}たまつて気持ちええもんだから、ふうふう焙^あっだから、その青苧殻^あさ刺^さしては引張り上げ、刺^さしては引張り上げて、ぺろつと取^とつて食^くつてしまつた。ほうしたらまた目覚^めまして見^みただけざあ、

「あら、また火の神さまが上^あがつてしまつた。困^こつたもんだ。仕方ないから寝^ねるより他^たない」

て、そして、

「火の神さま、火の神さま、木の唐戸^{からど}さ寝^ねたらええがんべか、石の唐戸^{からど}さ寝^ねたらええがんべがつす」

て聞いた。ほれから魚屋、梁^{はり}の上で鼻^{はな}つまんで、

「今夜寒^ふいから、木の唐戸^{からど}さ寝^ねた方がええぞ」

「ああ、木の唐戸^{からど}ええがつす」

ほうして、木の唐戸^{からど}さぽん^{ぽん}と入^いつて眠^ねてしまつた。ほうすつど、魚屋、そつと降りて来て、こんど爛鍋^{らんかく}の大きいなさ、水汲^みんで来て、お湯^ゆガタガタ煮^に立てて、そして唐戸^{からど}さ錠^{じやう}かけて、キリで孔^{あな}あけた。キリキリ、キリキリと孔^{あな}あいだど。

「ああ、キリキリ山のキリキリ鳥あさえずる。やかましくて眠ぶられるもんでない。ホーホー」

て、中で追ってやった。ほうして、キリキリ、キリキリとええあんばいにキリで孔大きく開けたどや。こんど湯煮立ったな流し込んでやった。

「あつ、ねずみの畜生、小便ひっかけあがった。シツシツ」
なて追ってやった。

「なんだこの畜生、熱い小便たれあがつて」
て、いるうちに、段々とじょうじょう一杯入ってやったど。

「あついあつい、あつい」

て、こん時だと思って、大鍋さわかした熱いお湯どんどん入ってやってしまったど。ほうすつど中でバダンバダンと苦しんではあ、とうとう音立てなくなってしまうた。ほうして夜明けてから錠はずして見たところあ、大きなムジナ、煮立湯かけらつではあ、みな赤むけになって死んでいだっけど。どろびんさんすけ。

(宮下 昇)

8 食わず女房

こういう部落に、一人者で稼ぐ者がいだったそうだ。そしておつかに飯食ままかせるいたましいわけだ。んだもんだから、なるだけは飯食ねおつか貰いたくていたていうんだ。そして飯食ねおつか貰いたいていたところあ、どつから聞いてそこさ仲人あ来たか、仲人来たて言うんだ。

「いや、ええおつかいたから、貰わねか」
て言わつじやていうんだ。そうすつど、

「いや、そんじや貰うべ」

そして貰つて見たところあ、なかなかええおつかだて言うんだ。仲々ええおつかだからいたところが三日たつても四日たつても飯食ねていうんだ。そうすつど喜んでいたていうんだ。んだげんど三日や四日だら我慢しているていうことも出来つけども、五日、十日、十五日と日は重なつて行くに、飯食ねもんだから、こんど野郎もはつと思つて氣あついだつて。

「ほんじゃ、こりやただ者でない」

て思ったから、こんどは稼ぎに出たふりして台所の二階さ上がつていたというんだ。ほうしたところあ、親父は稼ぎに行つた。その間に、まいどの味噌煮釜さ一つ炊いて、ヤキメシ拵え始めて、こちら一面並べだど。そして何するもんだべと思つて見つだところが、頭の髪の毛パカツと割つて、ザンギリかぶつた、角生えつた鬼だて言うんだ。ほうすつどそのヤキメシ、片端からみな入つて、ストンと平らげた。そして平らげたどこ見つた。

「こりや、飯どこでない、おれも食れる」

て、二階から這い出して逃げたところが、追っかけらつじや。そして追っかけらつて逃げるは逃げる。どこまで逃げて行つても隠れ場所もない。何も無いもんだから、息の続く足のある限り逃げて行つたところあ、田んぼにヨモギと菖蒲が生えつた。ちいとぼりの藪あつたていうんだ。そこさ逃げて行つたところあ、スイツとそいつは逃げて行つたど。ほうしたところあ鬼だつたていうごんだな。ほんで五月の節句に菖蒲とヨモギ立てるさあ、そのいわれだていうことだ。どろび

ん、三助、三助頭さ火がとんだ。

(遠藤富雄)

9 空寺の化けもの

ずうつと旅廻って行つて、暗くなつて泊めておくやいて言うたど。

あんまり様の悪い身なりしつたもんだから、

「おらんどこあ、今夜お客さまあつて泊めらんねえ」

隣どこさ行つて聞くど、

「おらんどこは病人があつて泊めらんね」

ほうしてどこさ行つても泊らんね、ほうすつと、おしまいの家で、

「おらえんどこはとても夜具もなくて泊めらんねげんど、裏に空寺一つある。そこでもよかつたら、かまわず行つて泊まつて行きやつたらええがんべ。んだげん

ども、あそこ、昔から化物出るて言うてるもんだから、そいつ気付けて……」

「いや、化物なんぼ出たて魂消ね」

て行つて泊まつたど。化物出てきた。

「何の化物だ」て言うたら、

「おれあ、納豆の化物だ」

「納豆になれっか」て言うたら、

「てんつ野郎、納豆になの、ならんねえ」

「なつて見せっか」

て言うたら、莫蔭の端おさえて、コロコロ、コロと莫蔭にくるまって音立てな
くなった。ほいつ、「おかしいな」と思つて開けてみたら、ぶるぶるていう納豆に
なつていた。そうしてもらつて来た餅焙つていだなき、そいつみなつけて食つて
しまった。

また化物あ出てきた。

「頭ぶんなぐりっこしろ」

お釈迦さまの前さ行つて、

「よし、よかんべ」

て、こんど、キンかぶつて化物さ、「にき、先に叩け」。ほうすつどヨーシというもんで、化物は拳骨さ息ハアツとかけて、頭を割れるほどひつぱたいだ。ゴンゴンていうど、「痛い」て、化物の方で言うて、こんど「ニサ、叩け」て言うど、キン叩き棒の大きなで後ろさ廻つて、ありつただけの力でボカーンと叩いたら、ギヤーツと言うた。そうしてがたがたとお釈迦さまの裏の裏窓破つて逃げて行つた。ほうしてゆつくり眠つて、朝に目覚めたら、村の人あ、

「さあ、あの和尚は、化物に食^かつてだべぞ」

て来てみたら高いびきで眠つた。起こさつて、

「なんだ、化物来なかつたか」

「化物来たつた。昨夜^{ゆんべな}なぐり殺して、おれ、ぶんなぐつてやったから、行つてみる」

て、そしてずうつと行つたらば血たらしめて、穴さ入り切んねで、穴の入口で倒つ

でいた大きな貉、頭割つで、そして手の甲は赤むけになつてキン叩いたのぞな、そして死んでいだど。

「いや、えらい坊さまだから、ここの和尚になつておくやい」
て言わつで、住みついだど。どろびん。

(宮下 昇)

10 化物ばなし

「お前は何の化物だ」て言うたら、「狸の化物だ」て言うた。

「狸のキンタマ、八畳敷ていうんだ。本当にそんなに伸ばされつか」

て言うた。「のばされる」「んじや、のばしてみる」て言うたら、見るみるうち

に伸ばしたていうんだ。ほうしたら火所ほどの隅すまこ、こんなに大きな石が焼けつだていうんだ。そいつ火箸さ引つかけて、そのひろげたカイツボさ、ポーンと上げて

やったら、「あつい、あつい」て、そのカイツポぐるぐるて巻いたど。と、その石巻き込んで、熱いあついて逃げて行つてしまった。そして行つてみたら、カイツポ焼けっぱたして死んでいた。

(宮下 昇)

11 狐 むかし

狐あ化けだんだつて。ほうして狐あ出てきて、くらんくらん、くらんと三べんばりひっくり返つて、おこん姉に化けだつて。

ほして、脇の畑から蕪一本、ぽんと引っこ抜いて、背中さぽんとやったら、ほいつあおぼこになつたど。ほして蔭の葉っぱかぶせて頭巾になつて、木の枝ポキンと押折つて手さ持ったら、提灯ちようちんになつたど。

「いや、うまく化けあがつたな」

と思つていたど。

「この野郎、おれ見っだの知しやねで、化けあがつたな。魂消らせて呉れっから」
と思つて、静かに待つてて、その前さ來たら、

オーワイヤレ オーワイヤレ ヤーレ

オーワイヤレ ヤレ

て、上手に子守唄うたつたて。ほうすつど丁度前さ來たとき、「なえだ！」て音
立てたら、

「ああー、魂消たこと、あらら、誰だと思つたれば、清太おんつあだごで。ああ
魂消た、ほんに」て。

「にしゃ、なんぼ上手に化けだつて、おれ、ちゃんと見っだぞ」

「あらら、見^めけらつじやながあ」

「どこさ行く」

「向い原のおばさ家^えさ、今夜、嫁とり祝儀あつて、ほこさ招^{まね}ばつて行くなだ。清
太おんつあ、狐の祝儀見たことあつか」

「まだ見たことないな、本物見たことないな」

「ほんじゃ、行つて見やんねが」

「よかんべ」

と。ほして、ノソリノソリと出かけたど。ほして行つたところあ、向こうの方さ灯りポカポカ、ポカポカと点^ついだな、

「ありや、あそこだ」

そして行つて、

「あの、狐の御祝儀さ人間なて行ぐど、御祝儀ぼっこれなつから、んだからあんまり悪れげんども丁度前に坪山あつから、その坪木の陰さ隠つで見ておくやいな」

「ああ、よしよし、わかつたわかつた」

て行つて、

「ここ、ええどごだ」

て、なかなか立派な坪あつたもんだから、坪のかげさ隠つで見つだていうなだ。

ほしたら、おこん姉あ、ガラガラと玄関の戸開けて「おばさ」て言うた。

「はい、あらら、おこんだつてこ。なんだまず、遅いごど。電話でも掛けてみんなねがど思つていたどこだった」

「こん吉あまず、寝起きあ悪くて、まずあんまり、じゃみてるもんだし、遅つてはあ、あまり不調法な」

「どれどれ、あら、こん吉、大きくなつたごど。ほんに口端のとんがり具合など父ちゃんそっくりだでそ」

なんて言うて、「まずまず、寄つて呉ろ」なて入つて行つた。ほしてしばらく経つたら、向こうの方からポカポカ、ポカポカと灯りが見えて来た。何だと思つたら、狐火だ。

「ああ、うん、あそこの狐の御祝儀だけあつて、狐火とばして来んな」

て思つているうちに、歌うたつて来た。長持だ、長持唄うたつてどんどん来たら、長持かつぎは来る、その後さ仲人あ来る、嫁むかさりは来る、嫁付き、賀殿とそろつて来た。魂消たことにあ、みな尻尾出したつていうなだ。

「なるほど、狐の御祝儀だから、尻尾出してるな」

そうしているうちに、こんど家の前さ来たら、

「近迎え、それそれ」

て、数の子豆、一升瓶持つて来て、

「早いお着きでおめでとうございます」

て、挨拶すんで、して、

「唄で受取りやつか、盃で受けとくやつか」

なて、長持受取り渡しすんで、入って行つた。ほうして中さ入って、こんど何をしつたか、ドダバダ、ドダバダていたけずも。

「大抵始まりそうだ」

と思つて、そおつと行つて、窓の下からのぞいてみた。ほうしたらお膳がずらりと並んでいた。さあ、そのお膳眺めたところ、なるほど狐の御祝儀だけあつて、お料理は全部油のお料理だ。お冷も油揚、お皿も油揚、お吸物も油揚、飯も油揚飯、みな油揚のないものあさつぱりないずもの。

「はあ、うまいことやってるもんだ」

と思つて、みなずらりと並んで、こんど三々九度の盃もすんで、ほしてこんど祝いことだからつて『謡い』が出た。謡は三つ。四海波から高砂謡つた。そうこうしてゐるうちに、こんど唄始まつて、仲人、

「んじゃ、おれ、皮切りに出しましょう」

て、松坂を出したど。そこで唄うたつて、ショーガイナは出る、大津絵は出る、いやとてもにぎやかだった。ほしてゐるうちに、誰か玄関の方からからと戸開ける。「さあ、誰か来た」と思つてわらわらと坪山さ行つて隠つて知しやねふりしつたところあ、おこん姉出てきたど。

「清太あんつあ、清太あんつあ」

て言うたら、「おう」て言うど、

「なんぼか寒がつたべ、あんまり寒いくて風邪でもひくと悪いからと思つて、一杯持つて来たから、こいつ飲んで待つてでよくやい」

て、見たところあ、重ね重箱さ、稻荷寿司、しかも本場だけあつて大した見事

なだ。そいつさ酒持って来て呉っじやもんだから、

「いや、御馳走なもんだな、われなあ」

「ゆっくり飲んで見でっておくやいよ。なお、裏に離れのお風呂あつから、あんまり寒いときにあ、誰もお風呂さ行かねから、そなた、ゆっくりお風呂さでも入って行っておくやい」

て、ほしてまた入って行つたずも。ほうして、まず、それ一杯御馳走になつて、寿司を御馳走になつて、もうこれあええ気分になつたもんだど。ほうしているうちに小寒くなつたので、一入り、せつかく言うて呉れつから風呂もらつて来つたとて行つてみた。とてもええ風呂だ。手甲、木の枝さ引っかけて、新しい石ケン、新しいタオル付いっだし、そこで顔洗つてカポリカポリと鼻唄などうたつていたというわけだな。

ほうして、うつらうつらしていたら、そのうちにだんだん夜明けてしまった。学校生徒通つたず、そこな。みんなゾロゾロ学校生徒通つて来てな、ちよいと道の脇見たら、桑畑の隅こにある溜桶の中さ、清太おんつあ入つて、何か小唄うたつ

ているてなだな。

「おいおい、見る見る、あそこ、清太おんつあ、んねが。何だ、あだな溜桶さ首つきり入って、シメシだか何だかで顔洗っていた」

「こんな、あつたもんでない。みんな一・二・三で呼ばってみろ、ええか一・二・三。清太おんつあ」

て言うた。そしたら、「おう」。ポカッと目覚めた。ところが溜桶さ入って、シメシで顔かぼりかぼり洗ってだ。そして脇見たら稲荷寿司だと思ったら、箱のぼつこれさ、馬の糞や汚ないものいっぱい、ぼつこれスズさ小便など入ったな、カポカポ飲んで、とうとう馬鹿にさつでだ。んだから狐退治するなんて、あれはお稲荷さまのお使いだから、そんな気起すもんでないど。どろびんさんすけ。

(宮下 昇)

12 四枚のお札

むかしあつたけど。和尚さまと小僧といだったど。そしてある日、小僧が、
「和尚さま、和尚さま、お彼岸も近づいて来たから、おれ、大沢山さ行つて、あそこ
にリンドウの花がいっぱい咲いっだから、明日行つて取つて来て悪れか」
て言つたら、和尚さん、

「いやいや、リンドウの花もええげんども、あの山に性^{たち}のわるい鬼婆いて、人食
うというもんだから、あそこは止めた方がええんねが」

「いや、鬼婆なんて本当にいたかいなにか分んねし、鬼婆なのさっぱり恐つかな
くない。んだからおれ、何でもかんでも明日行つてみたい」
て言うから、

「そうか、そんがい行きたいごんだれば、行つて来ればええごで」

と。そしてその日早く寝て、朝早く起きて和尚さまから御飯炊いてもらつて、
大きなヤキメシ二つ背負わせて、お菜に味噌漬と卵焼き拵つて呉つて出掛けた。

そして出掛けどきに和尚さまがその弁当さつてお札四枚呉れた。

「これは本当にありがたいお札だから、いよいよの、お前困ったときに、このお札をお願いしてこれを使え。落とさないように大事にして持つて行けよ」

て言われて、小僧は「はい」て言うて、懷さ入れて出かけた。そして一つ山越えて、ずうつと行ったら、いや広々としたどこに、いや咲いっだ、咲いっだ。リンドウの花とつても美しく咲いっだ。

「いや、こりやええどこさ来たもんだ」

そしてまず、お昼にはちよつと早いげんども、小腹も減ったから、弁当食つてそれから持つて帰ろうと思つて、場所のええどこさ腰かけて、その弁当食つてだ。そうしったら、とてもええ天気だったのが、にわかには曇つて来て、「おかしいなあ」ているうちに暗くなつてしまった。はて、困ったもんだなと思つているうちに、だんだんと真暗くなつてしまった。

「さあ、困った、提灯も松明も持つて来ないし、どうしたらええが分ない」
と思つて、向こうの方見だら灯りが見えた。

「ああ、あそこに灯りがある。あそこに行つてみよう」

と思つて、そうして行つたら、一軒家あつたど。ボツコレ家だげんど、灯りがついて中に誰かいたど。そして、「こんばんは、こんばんは」て言つたて言うんだな。出て来たのがそれこそ恐つかない顔面しつた婆だど。そうして気味のわるい婆だと思つたげんど、何とも仕様ないから、

「にわかに暗くなつて、何とも困つてしまったから、今晚一晚泊めておくんやねが」

て行つたら、

「ああ、ええにもええにも、泊つて行げ」

と。そしてその家見たら庭からずうつと離れ便所あるつて。そしてこつちの方が小さい家だげんど、台所と茶の間とあつて、炉端さ火どんどん焚いっただから、そこさ寄つてあたつていたど。ほうしたら、

「お前にうまい御馳走作つてやつから待つてろ」

「おれ、今おにぎり食べて来たばりだから、腹減んね」

て言うげんども、

「ええから、ええから、うまいもの食せつから、まず待ってろ」

て、陰さ行つて婆が何か御馳走拵えて、そして一人言たつてだつて。

「どうせ、あの小僧食うなだから、うまいものいっぱい食せて、食つたらなんぼかうまかんべ。んだから御馳走ありだけ拵えて食わせなくてなんねえ」

「さあ、大変だ。いよいよこりや、おれあ婆に食れるんだ。何とかして逃げる方法ないか」

と思つていろいろ考えた。そして、

「婆、婆、便所さ行きたくなつた。便所さやつてくれ」
て言うたら、

「お前、便所さ行くなて言うて、逃げる気でないか。待ってろ。んじや縄を付けてやつから」

て言うて、腰さぎつしりと縄結わえつけらつじや。それをズルズル、ズルズルと引張つて便所さ行つた。そして便所さ入つて考えた。

「なんとしても逃げなくてなんねえ」

んと、婆こっちの家のなか居て、縄ときどき引張る。「まだかあ」て言うど、「まだだあ」て言う。そうすつどまたグググッと引張る。そして「まだかあ」て言うど、「まだだあ」て、中で返事する。そうすつどまたそれから考えたど。

「よし、こんどき、あの和尚さまにもらつて来たお札をお頼みする他ない」

と考え出した。そしてその縄を腰から解いて、柱さぎつしり結えつけた。そして手を合わせてお願いした。

「あの鬼婆、まだだかて言うたら、まだだあて返事して下さい」

とお願ひして、お札をそこさ貼りつけて、そうして逃げ出したど。いや逃げた逃げた。それこそ暗いどこ、どこをどういう風に逃げたか分かんねど。その鬼婆、家の中で縄引張つてみつど、柱さ縛つていつから、小僧さ結わえつだど同じだ。

「まだかあ」て言うど、「まだだあ」て、お札が返事する。これは何時なんどき経つてか分んね。あんまり長いどて、不思議に思つたていうなだ。そして、

「まだ、お前便所に居んなが」

て行つてみたら、小僧はもうすでに逃げて行つて、そして縄が柱さぎつちり結わえつけてあつたど。

「よし、あの小僧、逃げ上がったな」

て言うんで、鬼婆、後追いかけたて言うんだ。その鬼婆、足が早いわ早いわ、「小僧待て」て言うんで追かける。小僧は一生懸命逃げっけんども、もう捕まりそうになった。そうすつど懷からお札一枚出して、「大川出る」て大きな声で叫んでそのお札を投げてやつど、いや、その川の大きな、ゴヴゴウと水流れる大川出たど。

ほうすつど婆、何としたらええかと思つて、あつちや行き、上ったり下ったりしていたけあ、こんど漕いだつて言うなだ。その間にどんどん、どんどん小僧逃げたげんども、婆、川漕いだがして、また上つて来たていうなだ。ほして、「小僧待て、小僧待て」て追いかけて、いよいよまた捕まりそうになった。こんどは仕方ない、もう一枚のお札出して、「砂山出る」て投げた。ほうしたら見る見るうちに砂山が出たていうんだ。さあ、その砂山、鬼婆のぼろうとすつどズルズ

ル崩れ、また登ろうとすつど、ずるずるとずっこけしてなあ、なかなか登らんね。そのうちに小僧はどんどん、どんどん逃げて来たげんども、とうとうその砂山、どうして越えたか越えてきた。ほうして今度はまた追かけられそうになった。そうすつど最後のお札を出して、「火の車出ろ」て投げた。そうしたところあ、大きな車、ぼうぼうと火燃えんな、ぐるぐる、ぐるぐると行つて、鬼婆そちさ行くかと思うと、そちさ転げ、こちち行こうとすつど、こちちさ転げて来、いやまず何とかかんとかして、そこくぐり抜けた。その間に小僧はお寺さ逃げ込んで来た。

「和尚さま、和尚さま、おれば助けてください」

「一体どうしたごんだ」

て言うたら、

「いや、鬼婆に追いかけられで、やつとここまで逃げて来たんだ。助けておくやい。和尚さま」

「よしよし、ほんじやら、お前は隠れる」

と言つて、押し入れの中さ隠つて、戸どんどんと閉めてしまった。そこさ鬼婆、息絶え絶えになつて追いかけて来た。

「はあはあ、小僧あ来たべ」

「小僧、まだ来ない」

「いや、来ないさあない。確かにここのお寺さ走り込んだこと見届けて来たんだ。小僧出せ」

ほうして、「一体、お前は何だ」「おれあ化物だ」「何の化物だ」
て言うたら、納豆の化物だて言う。

「何をテンツつかす。納豆の化物だなて、ほんじゃ納豆になれつか」
て言うたら、

「なられる」「んじゃ、なつてみる」

ほうして、ほのころころ、ころころと転がつていたけずあ、音立てなくなつたから、開けてみたら、ぐるぐると糸の出る納豆になつていたど。ほうすつど和尚さま、こつちで餅焙つて、何つけて食つたらええがどて、何もないから、醤油とたまり

か味噌とかでもつけて食う他ないと思つていたら、納豆出たから、醤油ぶっかけてドンブリさあけて、そうしてその納豆。ペロツと食つてしまつたつて。そして、

「小僧、小僧、出てこい」

て。出て来ねていうんだな。そうして行つてみたら、押入れの隅^{すま}こさすくんでぶるぶる、ぶるぶるふるえていた。

「何していつこんだ。化物など、おれ食つてしまつた」

「なじよして食つたごんだ、和尚さま」

て言うたら、

「納豆の化物だていうから、納豆になつてみろて言うたら、納豆になつたから、んだから焙つてだ餅さつけて。つうつと残つていたから、お前も食え」

て言うど、小僧も残つた納豆、ペロツと食つてやれやれて。んだからそんなどこさ行くなて言わつたどきにや、決して行くもんでないぞつて、和尚さま、よく教えたけど。どろびん。

(宮下 昇)

13 猿さる

智むこ

田さ水掛んねで困っていたどこさ、猿が聞きつけて来て、

「じんつあ、じんつあ、何しったどこだ」

と言うたんだ。そうしたところが、

「おれだと、される」

ということになったんだど。んだから、藁をもつかむ気持ちで、

「猿などに、こだなこと出つこんだべか」

と思つたげんど、困つたあげくだからな。

「ほんじゃれば、お前、なじよかしてみつか」

「おれあ、ええげんども、おれにも条件がある。娘もつてだな、かか欲しいから

呉んねが」

水掛けたいまんまに、

「あまりええ、あまりええ」

なて、ついふらふらと言つてしまつたど。そして言うたどころが、まんまんと水掛かつた。こんど、じじ困つたわけだべ。朝げんなつても起きらんねわけだ。ほしたらば大きい娘起こしに行つたわけだべ。まずな。

「じじ、御飯^{おま}食うあええげんども、われあ頼みも聞いて呉れねが」

「おじんちやの言うことは何でも聞くどこでない」

ては言うたげんども、猿のおかたになつて呉んねがて言うたところあ、

「嫌^やんだどこでない」

て言うた。二番目のもその通りだ。そして末娘がな、その話聞いたところが、

「いや、そいつだれば、おら行くべ」

ということだ。そいつが賢い娘だていうどこだ。そして猿のおかたに行つた。

里帰りのときに、実家さ餅、お土産に持つて行く。んだげんども家のじじは臼さ入つた餅でないと食ねと、臼がらみ背負わせた。そして山道通りかかつて来た
ら、

「あの桜の花美しいから、取つて呉ろ」

「おれは木登り商売だから、白など降ろすのめんどくさい」

て、白背負ったまま登って行つたのだ。そして「こいつか」て言うたら、「いや、そいつでない」「ほんじゃ、こいつか」て登って行つたら、

「いや、どうせ取つてもらうんでは、もつと上んなええ」
また登つたら、

「いまちいと、その天上んな、なおええ」

と、こういうわけだ。そしてバリバリと落つて死んでしまった。そして娘が帰つて来たど。

(赤木)

14 瓜 姫 子

瓜姫子のお母さんが、

「町さ用達しに行つて来つから、留守番してろ、天邪鬼来たて決して戸開けんなよ」

て言うて、出て行つたて。そして機織りしつたて。したら天邪鬼来て、

「瓜姫子、遊ばねが」

「遊ばね、おれ、機織れて言わつでだから、機織んなねから、遊ばんね」

「おれ、機織つどこ見せねが」

「見せらんね」

て、瓜姫子言うたて。

「ちいと戸隙開けて呉ろ。指入るくらいでええから、隙開けて呉ろ」

「こんでええか」

「いまちいと開けて呉ろ。いまちいと」

て言うたところあ、手びりびりあけて入つて来て、とうとう食い殺さつじや。

そして瓜姫子に化けて機織りしたつて。母ちゃんが、「瓜姫子、今帰ったぞ」

て帰つて来た。そしたら機織つてっけんども、どうもいつもの音と違う。そし

てよく聞いたら、おさ桜の音が、

瓜姫子のハタさ

天邪鬼はとまって

キーコパテン

そういう音立てて、「瓜姫子の機さ、天邪鬼はとまって、キーコパテン」で織つてゐる。

「ああ、こいつぁ天邪鬼だな」

て、ほうして気あついて、そこで天邪鬼、化けつだな、叩いて殺したど。

(宮下 昇)

15 瓜 姫 子

じじとばば暮らしたど。そしたればじじとばば、子持たずなんだな。そして

子ども欲しい子ども欲しいいたところが、その瓜が流つて来て、瓜食つてみたところが瓜の種子から美しいおぼこ生まつじやわけだ。そうすつど、

「こいつあ、瓜から生まつじやから、瓜姫子と名付ける」

と、こう言うて名付けたわけだそうだと。そしていたところが、じじとばば、稼ぎに行くとき、瓜姫子、機織りしたもんだそうだと。機織りしてで、稼ぎに出て行くときに、

「隣为天邪鬼は、せめられつから、戸開けろだの、こうだの言うたて、決して開けんよ」

こう言うて、じじ、ばば、稼ぎに行つたていうんだ。そして行つたところが、やっぱし案の定、昼間に天邪鬼、「瓜姫子、瓜姫子、遊べ」ていうて来たんだと。そして機織り一生懸命したところが、

「今日、これだけ織れつて、じじとばばに言わつたから、こいつ織んねうち、じじやとばばちゃ来たとき、何しつたつておんつあれつから、こいつ織んなねから、後に遊ぶから…」

こういう挨拶したど。そしていっけんども、その天邪鬼、ねっちよだから、

「いや、開けろ、開けろ」

ていうもんでいだんだな。そうすつど指一本入るほど開けて見ると、河童みたいなもの立ってだていうんだ。見れば恐つかないていうんだ。

「んだから開けんて言わつだな、開けてこりや」

て思つて、戸閉めつけんども、こんどとても指一本入るたけ開けたら、その天邪鬼に敵わねていうんだ。瓜姫子の女の力では…。

そしてるうちに手入るほど、腕入るほどだんだん開けて、身成り^な入るほどして、そうしてはあ、こんど寄つて行つてその瓜姫子、頭からびりびり皮剥いではあ、食つて、そして瓜姫子の衣裳着て、機さ上がつていたていうんだ。そして帰つて来たところあ、一生懸命で機織つているもんだから、

「にさ、暗くなつたに、やめんだ」

て、そのじじ、ばば言うげんども、

「いまちいとだから…」

て、決して機から降りて来ない。そうしたば、

「瓜姫子の好きなトコロ掘って来たから、ほだから来いて言うなだ」

て、じじとばば言うど、

「じきに行く」

ているわけだ。そしていよいよ機から降りて来て、見たところあ、じじとばばどこさ来て、じつと下向いているわけだ。そしてトコロ茹ゆでだな、「にき、好きだべ」て突出っだすと、トコロの毛もむしんねで、皮も剥むかねで、ガムガム食う。

「なんだ、にき、そんなことして今まで食ったことないに、そんなことして食う」
「毛あ毛のくすり、皮は皮のくすり」

て言うて、その天邪鬼、くつたていうなだ。そしてまず、ちようど後ろに池あつたそうだ。その池のほとりの木さ来て、「瓜姫子の機さ、天邪鬼はぶんのつて、チーロリ、ヌタポン」て鳥鳴くど。「はあておかしい鳥あ鳴くごんだ」て、まさか天邪鬼だとは思わねがった。

瓜姫子の機さ

天邪鬼はぶんのつて

チーロリ ヌタポン

て、なんぼも鳴くど。

それから気あついて、見たところが天邪鬼だ。こんどじじばば、めんごがつていた娘、その通りさつだ。戸突張り棒持^{とつ}つて叩きつぶしたど。そして野さ持つて行つたか、瓜姫子を立派に埋めて、桜の木植^いえたど。そして天邪鬼埋^いけたどこさ、萱棒三本とつて、チャカチャカと立てて来た。ところが、萱の根っこざあ、真赤なのは天邪鬼の血だど。どろびん。

(遠藤富雄)

16 鶴 女 房

山道通りかかったら、弓を受けて傷付いっただ鶴が倒れ苦しんだ。そしてそれ

をもつて来て、手当てをして返してやったんだ。そしたらある日、とてもええ若い娘が来て、そこのお嫁さんにして呉れて、一人者だったから、

「こんなアバラ家でも良かったら、嫁になつて呉れっか」

と寄せた。そして、

「おれ、機織られる」

「なんだ、お前、機織られっか、ほんじゃ織つて見て呉ろ」

て、機織らせた。一反織つて、

「町さ、こいつ持つて行つて売つて来てくろ」

て言わつて、持つて行つたら、いやとても高く売れた。帰つてきたら、また別な機織つてくれた。ほうして、なんぼもなんぼも機織つてくれて持つて行く。だんだん行く度に高くなつて、とんな大金持になつてしまった。

「一体、なじよして機織るもんだか」

機織つてつどこは絶対に見ないで呉ると頼まれていたげんど、決して見ないと約束したげんど、あまりにも上手にええ機織るもんだから、こつそりと見てや

ろうと思つて覗^{のぞ}き見た。ところが鶴だ。自分の毛を一本ずつ抜いてそいつで織つてた。もうすでに毛無くなるくらいに赤むけなるくらいまで抜いて、そして織つてだど。そうしたところがその機織出来上がつど、

「お前、おれの機織り見たな」

「実はお前に見ないと約束したげんども、あまり上手にええ機織るもんだから、どうして織るもんだと思つてのぞき見たんだ」

と言うたところが、

「実はおれは鶴だ。あるときお前に助けられた鶴だ。御恩返しに鶴の毛抜いて、お前さ織つて上げだんだ」

と言つて、

「もう見付けらつじや限りは、ここに居^でこと出ないから……」

「もう、しばらくここに居てくれ」

て頼んだげんども、とんどどこかに行つてしまつたけど。どろびん。

(宮下 昇)

17 糠福と米福

糠福と米福といったけど。姉の方は米福で、とつてもきれいな氣立てのやさしいええ娘だったど。糠福はその妹で、あんまり器量のええぐなくて、氣立てもええぐない娘だったど。して糠福のお母さんがいま居るげども、米福の継母だったど。それでことごとくに米福をいびっておったど。

「山栗拾いに行つて来い」

て言つて、袋を持たせられる。そうすつど米福の袋は底さ孔あいっだな持たせらつた。糠福の袋は孔のあいていない立派な袋を持たせらつじや。拾つても拾つても米福んなさは溜んねがつた。糠福は袋さいっぱい拾つて歸つてくる。そうすつど家さ来て、

「お前は栗拾つて来ねから御飯食せらんねえぞ」

て言わつて、そしていじめられつど。

そしてある日、山さ柴取りに行つたどこさ殿さまがお通りになつた。そして、

「召使いを一人欲しいんだが、なかなかええ娘いたから、お殿さまのどこさ来るように」

て、家来に申付けて行つたど。そしてその御家来がその家さ行つて、糠福と米福の家へ行つて、お母さんに、

「殿さまの召使いに召出されつから、二人づれで来い」

て言うたところが、お母さんは、

「この米福なて何も分んね奴だから、こんな者連れて行んことないから、糠福だけ連れて行く」

て、言うて一人連れて行つたど。そして米福は家に一人しよんぼり残つていたどさ、年寄のおじいさんが来て、そして、

「お前も行ってみろ」

「おら、着物もこの通りボロだし、髪もこんなにボサボサだし、とても殿さまの前さ行けねから、留守番してつからええ」

て言つたげんど、

「それはみな、おれ持って来た」

と言うて、新しい着物のええなと着せかえて、ほしてお化粧して呉れて、髪もとのえて呉れて、連れて行つた。そして行つたら一目見て、早速殿さまはこつちの娘ええと、そうして糠福が、どんな化粧して、ええ着物きせて連つて行がっだげんども、落第してしまつた。そしてお召かかえなんねがっだ。んだがら継子はいびるもんでない。心だけさえも立派にしてっど、そういう風に立身出世などできるんだから…。

(宮下 昇)

18 お糸 唐糸

むかしあつたけど。お糸というのが先妻の娘で、唐糸とていうのが後妻の娘で、そして父親が旅さ出かけて、半月も帰つて来ねがつたんだな。そうすつじど継か_ま継か_ま

かがお糸憎くていびるんだが、妹が姉孝行でな、姉かばって呉れっただけな。

「こういう御飯食せつから、姉さばり盛ってやつから、そこ食うなよ」

て、御飯さ毒入つで唐糸さ教えっど、唐糸は姉のお糸ばかばってやるんだけな。

そういう風になっているうちに、どうしても死なねもんだから、トビラ落し、夜眠ってだとかさトビラ落しを仕掛けて、

「晚げこいつ落すから、姉ちゃんどさ寝ていねで、こっちや寝ろよ」

て言うたら、それもこつそり姉ちゃんに教えるわけだど。そうすっど夜中にトビラ落し、ドツと落すど、つぶっで死んだと思つていつじど、やつぱり死んでない。そうして何しても死なねもんだから、そのお父さんの留守に姉ちゃん背負つて行つて、山さ埋めて来っこんだけな。そしたら妹が姉ちゃん、箱さ入つで背負つて行くつもりだ。そうすっど箱の角さ孔あけて、ヤキメシ握つてあずけて、

「この孔から御飯粒、ポロンポロンと落して行け」

て、妹教えるわけだ。そうしたところが、御飯粒ポロンポロン、落して行つたごんだけど。そして埋めて来たから、そうすっど妹、御飯粒探^たねて、次の日ずうつ

と尋ねて行つたど。そうすつど。

「あねちゃ、あねちゃ」

て呼ばつど、中で「はい」て音するごんだど。そして一生懸命で手で掘つていたところが、刀さした侍が通りかかつたど。そうすつじど、「何しつた」て言うど、「姉ちゃん、姉ちゃん、ここ埋めらつた」て泣き泣き掘るもんだから、侍刀で木伐つて掘つて助けだ^すごんだど。ほうすつど、

「こがな、おかちゃんでは行つたて何されつか分んねから、おらどこさあえべ」て言うもんで、侍の家さつれて行つたど。そして二人ともそこで住まつていたどこだな。そうすつどお父さんが帰つて来て、

「子どもら、お糸唐糸どこさ行つた」

て言うが、

「どこさ行つたか、居なぐなつた」

こんどはお父さんが子どもらむごさくて、毎日々々泣いているうちに、座頭になつてはあ、毎日考えているうちに六部になつて鉦^{かね}鳴らして子ども探ねに出かけ

たど。そしてどこさ行ったか行ってみたところが、その親父言うには、

お糸唐糸いたならば

この目はパッチリあいて見たい

て言うて、鉦鳴らして行ったら、そこ通りかかったら、子どもら聞きつけたど。

「なんだべ」

て出てみたところが、やっぱり自分の親父なものな。して、「父ちゃん」て言うじど、目パチッと開いたもんだど。そしてはあ、その後楽しく暮らしたていうけど。どろびん。

(鈴木ともよ)

19　くいごこむかし

むかしあつたけど。

じんつあとばんちやいだけど。ばんちやが川さ洗濯に行ったら、赤い小箱と白い小箱流つて来たけど。

白い小箱 こっちやこい

赤い小箱 そっちや行け

て言うたば、ピンクピンクと白い小箱こっちや来て、そいつ拾って来たど。そしては、くいごこ居たわけだ。

そしてそのくいごこが大きくなつて、畑さ行くのさ手伝つて、

あいつもつけろ クエンクエン、クエン

こいつもつけろ クエンクエン、クエン

て、畑さ、さんざん道具つけた後、

ばんちやものれ クエンクエン、クエン

じんつあものれ クエンクエン、クエン

て、畑さ行つたわけだな。そうしたところが、

ここほれ クエンクエン、クエン

そうすつど、じじあ掘ったわけだ。そしたら大判・小判がざくざく出た。そいつを家さ持つて来たら、家の中、大判小判でたいしたごんだもな。そうすつど、隣のばばが、

「火呉^くつじえ、おくらえせえ」
て来た。

「寄つて持つて行がれ」

て言うたど。そして寄つてみたところが、大した大判小判、まず積んでたもんだから、魂消て、「なじよなごんだ」て言うたところが、

「こういうことで、おらえのくいごこが、ここ掘れて言うもんだから、掘つたれば、このようなもの出たごんだ」

て教えたごで。

「はあ、そんじゃ、そのようなおもしろいこと、おれに、そのくいごこ貸せ」
て言うもんで、隣のばば、くいごこの首さ縄^なつけて、隣のばば借つて行つて、こんどあじじと二人して、歩^あえべなても言^やねな、いろいろつけたり、持ったりし

て行つたわけだ。ここ掘れなんとも言わねな、

「まず大抵ええがんべ」

なて掘つたごんだべ。したら、とても腐れものばり出るもんだから、

「このような畜生ない」

なていうもんで、山刀で頭叩いて殺してはあ、埋めて来たごんだど。そういうので、ええおじいさんが、

「おらえのくいごこ、よこしてくやれ」

て行つたどこ、

「あんな畜生、あつたもんでない、あんなもの殺して来たから」

て言わつたから、泣く泣く犬の埋めたどこさ松の木植えて来たど。その松の木がずうつと大きくなつて、そいつでスルス拵こしやつた。そして、

松の木のコンズルス

よう噛め　よう噛め

て言うど、ザクザク、ザクザクと大判小判出てくる。そこさまた、

「火呉っじえおくらえせえ」

て来たものな。そうしたところあ、そのスルス挽ひいたどこ見たところあ、大判小判が落ちるもんだから、

「火などいらねから、そのスルス貸かして呉くられ」

て、持って行ったもな。そして挽いてみたところあ、大判小判など出ねで、汚いものしか出なかつたど。そうすつど、またごしやえで、スルス焚くいたごんだ。そうすつと催促そそに行つたわけだ。

「おらえのスルス、よこして呉くやれ」

「あんなものはないから、みな焚くいたから、カマさくべて、みな焚くいたから」

そうしたところあ、泣き泣きスルス焚くかつたもんだどて、灰さらつて来たつて。

持つて来る途中に、風ではあつと灰が飛んだところが、枯木さ、まことにきれいな花が咲いた。そうすつどこりや面白いて、

「ほんじゃ、こいつさも掛けてみつか」

どて、掛けたところが、やつぱり同じ。そうすつど、「チチン、ポイポイ、コガ

ネ、サラリン」と灰つかんで投^ぶつたところが、花一面に咲いだんだ。その咲かせつだどこさ、殿さまお通りになつたんだど。そんなでまず、

「そこに居たもの、何者だ」

て言うたら、

「わたくし、花咲かじじいでございます」

「ほんじゃ、花咲かせてみる」

て言わつて、

チチン　　ポイポイ

コガネ　　サラリン

ていうたところあ、花咲いたわけだ。殿さま喜んではあ、たくさんの御褒美^{ごほうび}いただいてはあ、家に帰つて来たまなあ。そうすつど今度隣の火呉^くろばさま来て、その御褒美見たもんだから、

「ほんじゃ、その灰、いまちいとあんべから」

て言うもんで、そいつ集めて行つて、殿さまのお通り目がけて待つてたわけだ。

そうすっどお通りになつたもんだから、

「また来つた、じさま、また花咲かせてみる」

ていうわけだど。「チチン、ポイポイ、ユガネ、サラリン」てやつたところが殿さまの目さみな灰入つてしまつた。こんど殿さまに大したお叱りで、しばらくではあ、さんざんな目に会つたど。んだから人の真似ざあするもんでない。どろびん三助、猿の尻に毛が生えて、けんけん毛抜きで抜いたれば、まっかつかな血が出た。

(赤木精作)

20 鳥 吞 爺

むかしあつたけど。

じじあ、向い山さ柴刈りに行つて、昼飯食つて、昼眠したらば、とても晴れ

た春の日で、山桜やこぶしの花盛りで、とてもええ気持ちでうつらうつらしていたら、ちようどそばの木の枝き、きれいな鳥あ飛んで来て、とつてもええ声で面白く鳴いっただけど。

「何て鳴くのかなあ」

と、よつく聞いていたら、

アワチュウチュウ

ニシキサラサラ

五葉の宝を持つて

チチンブンブン

コロコロ キップツピイ

と、それこそ美しい声で節面白く、何べんも何べんも鳴くもんだから、じじあ口ぽかんと開けて見っだらば、その鳥あパタパタと飛んで来て、あつという間にじじの口から喉さチョロンと入って行つた。なんぼシャブキなどしたたで出て来ねがった。

「さてさて、困ったことになってしまったもんだ」

て考えていたら、何だか小腹痛めてきた。ほうして屁出そうになったもんだから、思い切つて屁たつてみた。いや魂消た。その屁あ、

アワチュウチュウ

ニシキサラサラ

五葉の宝を持つて

チチンプリン

コロコロ キップッパイ

て鳴つたど。その鳥の鳴き声と同じもんだど。さあ、じじあ何べんも屁たつて試してみたげんども、何べんたつても同じ小鳥の鳴声しか出ねもんだから、こんどは早く家さ行つてばさまに聞かせなんまえて思つて、すつとんで戻つて来た。

「ばさま、ばさま、早く出て来てみる」

「なんだ、じさま。どこか痛くでもして来たか」

心配顔で出て来たば、

「いか、いか、おれの屁聞いてみる」

「何だ、屁聞けざあ」

尻ひったぐって屁たっじやれば、何とその屁あ、

アワチュウチュウ

ニシキサラサラ

五葉の宝を持つて

チチンブンブン

コロコロ キップツピイ

て鳴ったど。さあ、ばさまもびっくり仰天した。

「いったい、なじよしたごんだ」

て言うから、「実は山で、これこれで……」て聞かせたど。それから隣近所の人々招ばて、時々その屁聞かせた。みんな喜ばせていたごんだど。その話はだんだんと弘まって行って、殿さまの耳さ入って、お城さお招び出しになった。ばさまもいろいろ心配して殿さま不調法にならないようになって、新しい禪しめさせたり、

きれいな着物きせたりして、お城さ出かけて行つたど。

お城の門番に、

「あたしは築沢の屁たれじじでございます」

と言つたら、門番、お達しがあつたと見えて、さつそく奥さ通されて殿さまは一段と高いところから、

「これこれ、その方、屁たれじじいか、聞くとところ、その方大変面白い屁たれるそうだが、苦しくないから、ずうっと近寄つてたれて聞かせよ」

とのお言葉あつたど。「ははあ」とかしこまつたど。「しからばごめん」て、うやうやしく着物まくり上げて、禪をはずして屁をおん出して、恐る恐る屁たれた。思うように出ず、ふるえ声だった。その屁は、「アワ…チュウ…チュウ…ニシキ…サラサラ…、五葉の宝を持つて、チチン…プン…コロコロ…キップウパイ…」なて、ふるえる屁しか出なかつた。殿さま、

「苦しくないから、思い切つて、たつてみる」

ていうお声かかつたもんだから、ははあと心得て、ふんばりふんばつて、思い

切つてやった。

アワチュウチュウ

ニシキサラサラ

五葉の宝を持つて

チチンブンブン

コロコロ キップツピイ

これあ大したもんだ。「こんどはちいと節つけてやってみて上げべえ」と思つて、腹へっこましたりふくらましたりして、節つけて、「アワチュウチュウ、ニシキサラサラ、五葉の宝を持つて、チチンブンブン、コロコロ、キップツピイ」

さあ、まず、腹などへっこんで行つて、尻の孔など少々痛くなるくらい。ほうしていっぱい聞かせ申して大変おほめにあずかつて御褒美山ほだいただいて家さ歸つて来たど。ばばは大変喜んだ。みんなその話していたら、隣の欲ふかばば、そいつ見て、

「そんじゃ、おらの家のじじも、屁たれにやらんなね」

じじさ話して、前の晩げに食いもの、たんともないな、ありだけ、腐れかかった芋だの牛蒡だの、屁の出そうなもの、ありだけ煮て食せた。じじあ腹くつつくて食んねていうの、屁あいつぱい出るように、まず無理して食え、食えて食せたもんだから、その晩げ、じじあ腹痛^やめて、やつとこらえて朝げ早く起きて、じじどこ追い出してやった。じじあ途中で腹痛めつけんども我慢して、これあ屁あ溜^こつたんだべと思つて、そしてはあ、やつと殿さまんどこまで辿りついた。ほうして門番さ申上げだらば、

「うわあ、また来たか、早く屁聞かせろ、殿さまお待ちかねだぞ」

て、早速殿さまの前さ出ろなて言わんねうちに、のこのこ出て行つて、ほうして真黒い汚い禪ふったくつて、はずして、ほうしてまずはあ、やつと耐^こえつた屁、ありだけ思い切つてたつじやもんだから、さあ腹のとけつたその屁の種子あ一面にびりびり、びりびり、ぶあーていうじどはあ、大広間一面吹つとんで行つた。

さあ、殿さまの顔から、ぐるりにいる御家老方や腰元衆、顔や着物は糞だらけになつて殿さま怒つて、

「無礼者、屁の口とめろ、屁口とめろ」

大声で怒鳴って、庭先さ引き出さつて、さんざんに引張だがつて、ほうして傷だらけになつて、手打ちだけはやつと許さつてほうほうの態で帰つて来た。家では、「じじあ殿さまから御褒美いっぱいもらつて来るんだか」と思つて、ばば、屋根の上さあがつて、それこそヘラで尻叩いて待つてだ。ところがじじあ向こうから唄うたつて来た。

「おらえのじじあ、唄つたこともない花笠音頭など唄つて、なんぼうれしいだか」
て、だんだん近づいて見たら、唄でない。泣き泣き来たずま。

「ううん、うん。んだから、ばば、食んね食んねていうもの、いっぱい食せたから、おれ腹とけて殿さまの前でビリ糞出てしまったんだあ」

て、泣き泣き。

「なんだ、その様、まず」

なて、ばば怒つてみたて仕様ない。じじあ頭傷だらけ、こころなの血だらけなて来てはあ、後は何日も何日も寝込んでしまった。んだから人の真似して欲たけ

て、しもさんねこと絶対するもんでないけど。どろびん。

(宮下 昇)

21 笠地藏 ― 笠の代 ―

むかしあつたけど。

じじどばばいだっけど。そして一生懸命で笠を作った。じじとばば二人で掛つて笠作って、六つ出たから、

「じじ、町さ行って、こいつ売って何か食いものでも買って来て呉ろ」

「よかんべ」て言うんで、じさま、その笠六つ背負って出かけたところが、途中まで行ったら大雨降りになった。ほして町まで行って売って来んなねと思つて行つたところが、道傍に地藏さまが六つ立ってだど。雨に、頭から何にもかぶらずに、ずぶ濡れになって、じゅぐじゅぐと濡れっだもんだから、ああもつたいな

いと言つて、その笠を全部地藏さまさかぶせてしまつたつて。そして町さ行かないで空身からみで家さ歸つて来たつて。そして、

「ばば、ばば、おれ、笠売つて何かうまいもの買つて来つかどていたな、あんまり可哀そうだと思つてみな、その笠をかぶせ申して来たんだ。んだから何も買つて来ないげんども、菜っぱ汁で我慢して、また一生懸命で笠拵つて、こんど買つてくるようにすんべ」

そうしたらば、

「ああ、ええこととして来たな、何にも氣にすつことないから、お粥でもすすつて、早く、今夜寒いから寝んべ」

と言つて、床に着いたど。そしてトロリと一眠入りしたと思つたら、何か向うの遠いどこから音がして、

「はて、何だろふなあ」

と思つていっど、だんだん近づいて来たどこ聞いたら、大勢の台持だいもち（車）が来た。そして、

「ヨイトモシヨ、ヨイトモシヨ」

「はて、何の音だかなあ」と思つて何を引張つて来たのかなあと思つて……。だんだん近づいて来たら、

じじあ家あどこだ 笠の代を引いて来た

ああ、ヨイトモシヨ ヨイトモシヨ

と音するていうんだな。

「はあてな、何だろう、今頃あんな台持率いて、じじあ家どこだて、おら家さ来^えんであんまいか」

もう、びくびくして寝つた。そうしているうちにだんだん、「ヨイトモシヨ、ヨイトモシヨ」と音が大きくなつて来たんだと。

「じじあ家あどこだ、まだまだあっちの小屋だ、笠の代を率いて来た、ヨイトモシヨ、ヨイトモシヨ」

て、だんだん近づいて来たていうんだ。ほうして先に立てた奴あ、

「ああ、ここだ、ここだ。この家だぞ」

て言うんで、じじの軒場さ来たていうんだな。

「さあ困った。何事起きるんだろう」

と思つていたところが、

「待て、待て、梯子ないか」

どかて、いたけざあ、軒場さ梯子かける音したと思つたら、高窓がらり開けて、
そつから何かドドドドーと家さ放り込んで、「さあ帰れ、帰れ」て言うもんで、引
き上げて行つた。さあ、じじとばばはぶるぶるふるえて恐かなくて…。

まず遠のいて行つたから、「ばば起きてみる」「じじ起きてみる」「んじやら二人
一緒に起きたらええがんべ」

て言うて、起きて灯し^{あか}を点けてみたところが、それあ大判小判がごっそりと、
そこさ投げ込まれていた。

「ああ、じいさんじいさん、お前、さつき地藏さま困つてつどこ見て笠を上げて
来た、その笠の代を率いて来て下さったんだ。こんなありがたい、ほだから困つ
てる人があつたらそういう風に尽くしておく、こういう御方弁が来るんだから

な」

て言うて、

「なるほど、これあええこと来たな」

て、一生安泰で暮らしたけど。どろびん。

(宮下 昇)

22 猿 地 蔵

山さ行ったら猿が岩の割れ目さ酒造っていた。いわゆるサルナシ酒だ。そいつ飲んでとつても廻って、そしてええ機嫌なつたもんだから、ゴロリ寝つた。そしてそこさ猿が大勢出てきて、

「あらら、おら方の地蔵さま、どこさ行つたと思つたば、ここさ来て眠てやつた。早く持^たつて移し申せ」

と、みんなでお持たがきしたど。ほらヨイサ、ヨイサとみんなで持つて行つたていうなだ。そしたら大川あつた。そして川さかかったところあ、

「氣いつけるよ、みんな右だから、転ばねように、地藏さまどこ落したら大変だぞ」
て行つたら、こんどあ禪からキンタマがぶら下がった。

「おお、何か下がったぞ」

ほうすつど親方猿あ、

「下がったは何だ」

そしたら、じじは、

「お経、小袋」て言うた。

「ああ、お経の小袋だど、ありがたいこと、ありがたいこと」

ほうしたれば、こんど屁ブウと出た。

「おお、何だ。今の音あ」

「鳴ったは何だ」「時の太鼓」「ああ、時の太鼓だど、ありがたいもんだ」

そのうちにその屁はくさいもんだから、猿の鼻さプーンと匂つて行つた。

「くさいは何だ」「香の煙」「香の煙だど、本当にありがたいことなあ」

て、かげさユサユサと持つて行つたど。そして猿の部落さ行つて地藏さまんどこさ、ちゃんと飾り申して、

「さあ、やつと戻つたから、こんどお祀りしろ」

と、そして餅搗くやら、お菓子を上げるやら、お供えものいっぱいして、みな帰つて行つた。そいつごつそり持つて逃げて来た。そして家さもつて来てみたら隣の欲ふかば来て、

「何だ、この御馳走、一体どつから持つて来た」

「おらえのじじあ、山さ行つて寝つたら、猿あ来て、おら方の地藏さまだて言うて、つれて行つて祀つて呉つじやもんだから、そつから持つて来たんだ」

て言うた。

「ははあ、ほんじゃ、おらえのじじもやんなね」

て、ほうして、

「じさま、じさま、隣のじじなど、猿んどこさ行つて、いや、大した御馳走いっ

「はいもらつて来たから、お前も行つて来い」

「何て行ん^いごんだ」

「何てええから、かまわずええから、行つてさえ見つどええんだから行つてみる」

「んで、行つてみつかなあ」

て出掛けた。ほうしてそこさ行つて寝つだど。ほうしたところあ、猿あ来て、

「何だ、まだここまで来てやつたどれこ。早く連れ^つ申せ」

て、また同じに持つて行つた。ほうして川渡つていそいそと行つたところあ、

また汚い禪から、キンタマぶら下がつた。

「下つたは何だ」

て言うところあ、

「キンタマだあ！」

て言うた。

「何だ、キンタマだなて言うでこ」

そうしているうちに、屁ブウツと出た。

「なつたは何だ」

したれば、

「屁だ」て言うた。

「何だ、おかしいぞ、この地藏さま」

「いやいや、くさいにもくさいにも、そのニンニク屁でもあんべか、何だか」

「くさいは何だ」

「屁だもの、くさいごで」て言うた。そうしたら、

「何だ、こいつあ地藏さま、んない。じじだ。こんげなものに騙さつていられるもんか」

て、こんどはみんなで顔、かつつあいで、めちやくちやに食つちやびらつで、川の中さだんぼらぶん投げらつで、ほうして、

「さあ、歩えべ、歩えべ」

て行つてしまった。じじは御褒美もらいと思つて行つたな、大した怪我^{けが}して、血だら真赤になつて家さ帰つて来たんだから、人の真似なてして、欲たけねんだ

けど。どろびん。

(宮下 昇)

23 猿 地 蔵

むかしあつたけど。山さ団子こさえてもらつて行つて食つたごんだど。んだもんだから、

「地藏さま、こんなどこさもつかえつてあつた。これ、地藏さま、こがえして置がんねがら、場所のええどこさ地藏さま移し申さんなね」
て、かつがつでから、じじあ目覚めたもんだも。

「おえんさ、おえんさ」

て、川漕いでみんな渡つて行くとき、

「猿ぶんぐり濡らすとも、地藏ぶんぐり濡らすな、おえんさ、おえんさ」

て行つた。よいおじいさんはそのままこらえて、そしていろいろなお供えもの
猿あお供えして帰つて行つた。

「まず、今日はええことした」

て、ええじんつあは、そいつ一背負いもらつて来て、そうすつど隣のいじわる
ばあさん来て、

「なじよなごんで、そがな持つて来た」

「おらえのじじちや、こういうごんだ」

て言うもんだから、隣のいじわるばあの、じじなの山さ行くこともないな、団
子こさえて、よけいに粉まで持たせて、

「食うべど食ねべど、粉だけ塗つて寝てろよ」

て教えたど。そうすつど食くだくない団子食つたせいでもあつたか、匂いのええ
な放したごんだべ。そうすつど「地藏さま、屁たれるはずない」て、ザブンと投
げらっただけど。どろびん。

（赤木精作）

24 金たれ地藏

毎日、金一枚ずつたれる地藏さまあつたど。そいつお祀りしていて、毎日金一枚ずつたれる。そいつ欲しくて欲しくて、ゆずらんねて言うな、

「ゆずらんね時あ、貸してやれ、ほうしておれあ一杯出すから、貸してやれ」
て、むりやり持つて来て、そうして飾ってだら、やっぱ一枚ずつ出る。

「なんぼこの地藏さまの腹さ金いっぱい入っていだんだか、んだら、一ぺんでいっぱいたれらせて、そして空にして返してやんべと思つて、火箸で尻の孔大きく開けたていうんだな。ところが中から出て来たものは、砂ばかりだったど。何にも入っていながつたど。ほうしてはあ、ただ損して返してやつたど。そうして元の家さ行ったら、また金一枚ずつたれるようになったど。んだから欲深かたけて、一ぺんに金取つてやるなんて、決して思うもんでないど。どろびん。

(宮下 昇)

25 鼻 高 小 槌

団子こさつてだな、コロコロ転んで行つて、孔さ入つて行つて、そいつ追かけて探ねて行つた。「団子どの、団子どの、どこまでござる」

そしてどんどんとねずみ孔さ入つて行つたもんだな。コロコロと。そしたらねずみの家さ行つた。そして、

「いま、団子ここさ転んで来ねがつたべか」
て聞いたんだな。そしたら、

「いや、転んで来たつた。んだげんど、あんまりうまそうな団子なもんだから、みな御馳走になつた」

「さあさあ困つた。んだげんど仕方ない、仕方ない。お前の方も腹減つていたべから、仕方ないごで」

と。ほして帰んべと思つたら、お土産もらつたんだな。ほうしてそのお土産が打出の小槌だつたど。ほうして打出の小槌は願いごとは何でもかなう打出の小槌

だど。

「んだから、自分でお願いごとあったら、こいつ振って願え」

と言わっじゃ。ところがその男は鼻が非常に低かった。鼻びっちな男だった。と鼻伸ばしたくて、

「おれ鼻伸びろ、おれ鼻伸びろ」

て振ったていうんだ。ほうしたらグングン、グングンと伸びて行っただていうんだ。

「いや、これは面白い、なんぼ伸びっか、一つ思い切って伸ばしてみんべ」
と思つて、

「おれ鼻伸びろ、おれ鼻伸びろ」

ていうたところが、天竺まで行ってしまった。ほうして天竺の家さ行つて、天竺の家の炉端で当つて芋あぶりしたところさ、何かモクモク、モクモクと出てきた。

「何か出て来たな、何だ何だ」

て見たら、茸みたいな出てきた。ほうすつどそいつさ、

「火箸さしてみろ」

て、刺したていうんだ。ところがその下にいた奴が「痛い痛い」。火箸ささつだから、痛いわけだ。こんどやしゃながつて、

「おれあ鼻縮め、鼻縮め」

て叩いたていうんだ。ところが上さ火箸ささつてで、ちぢんで来ないから、体の方あ天上さ上がって行つた。お天竺まで上がって行つたていうわけだ。「痛い痛い」て泣き泣き行つたところあ、ちようど天竺の家の囲炉裏の下まで行つた。ほうして、下で、

「いたい、いたい、おれ鼻から火箸抜け、火箸抜け」

ていうたもんだから、

「何だ、誰かの鼻だて言うどれ、そんがえな火箸さして悪いごで」

て、その火箸を抜いた。ところがつつん抜けて落ちて行つたど。ほうしてはあ、下さ来て、天竺から下まで落ちたから、ビチャンコにつぶつて死んでしまったけ。

んだからなんぼ願いごとかなうったって、そのような馬鹿な願いごとするもんでないけど。どろびん。

(宮下 昇)

26 和尚と小僧（小僧殺し）

サルナシの実の砂糖漬けしたら、小僧食いだいげんど絶対に食せらんねていうから、何だていうたら、

「こいつぁ小僧殺しというもんだ」

そして、

「こいつ小僧食うど死ぬから小僧食^かんねもんだ」

て言うてだ。と、和尚さまの留守に、一番大切にしまった花瓶思い切って割ってそしてそいつツルリ平らげて、そして泣ிட்ட。

「なんで泣ிட்ட」

ていうたところあ、

「和尚さまの大事な花瓶割ったから、申し訳ないから、死のうと思つて小僧殺し食つたげんど、まだ死なんね」

て言うたど。

(宮下 昇)

27 和尚と小僧

和尚さま、御法事さ行つて来つから、「裏の六郎太来たたて、鈴貸せて来つかも知んないがら、絶対に貸してなんねえぞ」て言うて出て行つた。そこさ六郎太来て、

「小僧、ちよつと鈴貸さねが」

「貸さんね、和尚さまに、貸すなて言わつた、貸さね」

「ちよつこらでええから貸せ」「貸さんね」「和尚さまどこさ行つた」「御法事さ行つた」

「んだら御法事から帰つて来ないうちに、ちゃんと返すから、んだからちよつくら貸せ」

「本当にちよつとだぞ」

て、貸してやつた。そうしてはあ、御法事終つて、お昼過ぎて御法事終わるだらうと思うげども、持つて来ねていうんだ。

それから裏の山さ行つて見たていうんだな。そうしたところが、一生懸命で踊つていた。

「はあ、小僧来たか、ほんじやお前もはまれ」

て、無理矢理その踊りさはめらつて、ほうして六郎太仲間いっぱい集まつて踊つていた。

ザングザング　ヒンザング

ザングザング ヒンザング

ヒンザンタラシのヒンザング

和尚さま ござらねど

ねっから拍子がそろわね

そしてガランガランと鈴振って踊っていた。そうすつと小僧も仕方ないから、何にも古い文句知しやねから、

レイよこせ 六郎太

レイよこせ 六郎太

て、混ざって踊っていた。和尚さま御法事から帰って来て、「小僧、今来たぞ」て言うげんども、音しね。「はて、おかしいな」と思つて中さ入つて、いつも鈴置くどこさ行つてみたら鈴あない。

「さあ、六郎太にもつて行がつだな」

と思つて、ほうして裏さ行つてみたていうなだな。そうしたら遠いところからカランカランと鈴の音する。ほうしていいよ現場さ行つてみたところあ、踊り

狂っていた。和尚さま、

「何だ、この野郎べら」

て言うたれば、

「いや、和尚さま、ござったぞ、さあ、まず一つはまって踊っておくやい」

て、まず御神酒あ出て、御馳走になって、和尚もはまってしまった。ほうすつど片方の六郎太は、

ザングザング ヒンザング

ザングザング ヒンザング

ヒンザンタラシのヒンザング

和尚さま ござらねど ねっから拍子がそろわね

そうすつど小僧は「鈴れいよこせ、六郎太」。こんどは和尚さま、「鈴の一つはモノでもない、ふんつぶされんなサンシヨの棒」て、みんな暗くなるまで踊ったど。

(宮下 昇)

28 粗 こ っ 者

突飛な、栄三あんにや、あした休み日だから、お前も字上手になるように「亀岡のお文殊さまさお詣りして来い」て言わっじやど。ほして朝げ早く行ぐど、日帰りしられっから行ったついでに、赤湯さ行ってお八幡さまお詣りして来いて、ほして夜のうちにヤキメシを握ってもらって、お賽錢をもらって、準備したんだって。ほして、

「お前、いつも禪、ろくなものしないから、特別に赤い禪を買って来て呉っじやから、ほいつして行げ」

て、赤い禪をもらってな、そいつ枕元さ置いて、暗いうちに出かけたていうんだ。ほして、

「ヤキメシはここに置くぞ」

て、その脇さ包んでもらったな、そいつ背負って出かけたど。大抵こんど赤芝通り抜けて、館山さ行った頃になったら、夜明けて来たから、一つ赤い禪をみん

なに見せてやろうと思つて、尻をぐらり高々とふつたぐつた。みんなのぞいて見て笑つてゐる。

「はあ、おれの赤い褌、目についたな」

と思つて、行つたていうなだ。ほしていよいよ亀岡さ行つて、お文殊さまさ行つて、

「こいつは小遣いだぞ」

て言うて、五十銭、

「こつちはお賽銭だ」

て、二銭銅貨どかてもらつて行つた。そいつ間違つて五十銭銀貨の方お賽銭箱さ入^いつでしまった。そしてそこでお詣りして行つて、こんど赤湯さ行つて、お八幡さまさ行つたんだ。ほして茶屋さ尻かけてヤキメシ昼間になつたから食うがと思つて風呂敷ひろげて、ゴロゴロと風呂敷といたところが、ヤキメシだと思つて背負つて行つたの、漬物石だ。そいつあゴロゴロ、ゴロゴロ転んで行つて、脇にあつた酒ガメさぶつつかつてしまった。ほして酒はみなこぼつて、いやあ怒

らつで、怒らつで、錢置いて言わつで、ほして錢出すかと思つたら、お賽錢二錢持つてだきりで、小遣いの方はなかった。ほしてはあ、困つてしまつて、あやまつてあやまつて、尻ふたぐつて、

「なんだ貴様、禪もしないで、尻ふつたくつて、何処の者だ」

て言わつたごんだど。ちよつと見たところが禪しつたと思つたら、忘れてしないで行つたんだけど。道理で途中でみんなおれどこ見て笑うべと思つたど。んだからそこらさ行くどきは、よつく氣付けて、忘れものしないようにアパタパて間違つたりしないようにしなねけど。どろびん。

(宮下 昇)

29 南の山の馬鹿聾

南の山から聾もらつた。その聾は稼ぎ者だし、男前も大變よかつたが、世間は

全然分かんねんだげんども、おどつつあま、おどつつあまて仕えるもんだから、大変可愛がつていた。ほして本家の家で嫁取り祝儀あつて、そこさ二人でお招ばれしたんだ。ほして、

「お前も、いろいろ世間のこと憶えていんなねんだから、よつく見て大人になんねえぞ」

「はい」

「お祝い、なんぼ持つて行ったらええんだか」

「一人ならば五千円、二人だったら七千円さ反物の一反もつけて持つて行かんかねべ。この間反物屋さ行ったらば、安くまけるていう、少し傷あつけんども、よつく見ないと傷分ない反物あつから買って来た。んだからそいつ持つて行くべ」
そして、

「このお土産はお前出せ。お前はこれから大人になんなねだから、お前、お土産物出せ」

て、そしてその聲はなかなか南の山から来たげんど、芸人だつたど。唄もうた

えば踊りも知った。謡も知った。

「おどつつあま、御祝儀に行つて、唄うたつて悪れ^わべがっし」

「ああ、ええどこでない。ありだけ祝つて来い。んだげんども、いつ、時でもない時唄つたりすつど、われから、おれ合図すつから、そんどきお前唄うようにしろ」

「はい」

て出かけたど。そして行つて、まずちよつと遅つて行つたら、親族衆もおそろいんどこさ行つて、そして、

「お前、お土産、ほれ、出せ」

て、合図したところあ、聲は出した。

「おどつつあまどこの前から相談したどこだつす、本当ならば五千円も持つて来つど、ええどこだげんど、二人お招^よばれたから一万円とも行くまいからまず七千円でええがんで、七千円包んで来たどこだつす。そいつさ反物一反つけたらええがんで、おどつつあま、この間、反物屋さ行つたらば、つうと傷あつけ

ண்டும்、二千円という札ついっだもんだから、そいつ買って来たから、そいつ持って来たどこだ。こいつ納めておくやい」

家で相談したことみな喋くってしまったんだ。そうして向こうの家でもはあ、あつけにとらつでだとはあ、ほうしてちよいつと親父の顔見たところあ、親父はにらみつけてたて言うんだ。

「はあ、今謡い唄えていうもんだ、目で合図したね」

「ほんじゃ、ええがんべがつす。おどつつあま」

ていたけずあ、高砂やつてしまったていうんだ。そうすつど、今度聾は目などくつついて立派に力んで、なかなか上手だていうんだ。そうして唄って、ちよいつとおどつつあまの顔見たら、さっきだよりもにらみつけらったんだど。

「はあ、こんどは唄うたえて言うごんだな」

こんどは松坂を唄って、ちよえつと親父んどこ見つど親父はまだにらむ。ほうして、おしまいには踊りおどってしまった。おどつつあま、やしやえながって、お祝儀さはまんねで、聾の手引張って、がらがらと逃げてきた。

30 南の山の馬鹿髻

南の山さ髻に行んことになった。どんな馬好きな若い者だった。いよいよ今日馬とも別れて南の山さ髻に行かなね日来たていうわけだ。そうすつどその髻どの、毎朝馬の水浴せ。南の山ではまだどんな風にして御祝儀したらええであろうて、親族会議開いた。下手な^{ひら}こととして、開けたどこから髻さんもらうに、笑わつでいらんねがら、先様のやることかまわず真似したらええだろう。そしてそれ他ないだろうて待つてだど。そしていよいよその日になってはあ、朝から準備したり何かしていた。髻さん、馬と最後の別れで仕事着一枚着て細^{ほそ}こ帯しめて、川さ行つてきれいに洗つて、そうしてトットツ、トットツ、馬さのつて裸馬で家さ帰る途中、何たまげたか馬とび出した。ドウドウ、ドウドウと手綱引つ止めつけんども、止るもんでない。ボンボン、ボンボンと走り出して、いや、乱れてしまつ

たていうなだ。それから止めるなんて性ないから、すっかりタテガミさしがみつ
いて、落ちないようにだけはあ、要心してはあ、かまわず氣のままに走って行っ
た。ほして一軒の家さ行つて、ポンと止まった。見たら今日聳に来る家の前さ止
まった。途中走っているうちに細こ帯は千切つでとんで行く。仕事着は吹つとん
で行く。禪もとんで行く。丸っ裸になつて裸馬さのつてその家の前さ着いだて
いうんだな。そうしたら、先に見合ひして知つてゐるもんだから、

「そう、聳さま、ござった。何だ、早いこと、聳さま、どんな格好してござった」
「丸っ裸でござった」

「さあ大変だ。んじやらみんな紋付脱いでしまえ」

そうしてこんど、それ脱げ、それ脱げていうもんで、家内中丸裸になつてしまつ
た。そうして、

「お早いお着きでございます。さあ、どうぞどうぞお上がり下さい」

ていうもんで、座敷さ上げたていう。そうして早速はあ、お膳など、まだお料
理などよつく出ないなたげんど始まつたていうなだ。そうしてずらりと並んで、

嫁も丸裸、仲人もおどつつまみな丸裸でずらりとお膳さ座つたというわけよ。ほうして最初片方の手で押さえていたというわけよ。ところがいいよおサンコトになったら、盃、片手で具合悪いというなだな。それから仕方ないから、お吸物のお椀の蓋さ股倉さ置いだんだ。ほうしたら、

「ははあ、こりや、こういうことするもんだな」

と思うて、お仲人さまもお吸物の蓋とつかぶせる。嫁さも仲人カミがかぶせる。全部股倉さお吸物の蓋でかぶせたど。そしておサンコトやったど。だんだん氣力が落付いて来たところが、ちらりちらりと横目で嫁の太股の辺り、めきめきと氣分出して来たど。それから仕方ないから、こんど膝さギツチリはさんでいたというんだ。そうしてやっているうちに、足がしびれて来たというんだ。あんまり固く膝まいていたもんで、足少しすべらしてやったというんだ。ところが股さはさんでいたの、はずれて、お吸物の蓋がポーンととび上がって天井板さカランカランと吹つとんで行った。そうすつとお仲人さまやつけんども、なかなかとばないというんだ。こんどは手でおさえて、突っかけて振っけんども、うまく

行かない。ほうすつど仕方ないもんだから、お吸物の蓋おさえて、親指のシッペでポーンとはじてやったど。ほうしたら嫁付き、仲人かみがやる、嫁がやる、いや、お吸物の蓋の雨だていうんだ。座敷中バラバラになったしまった。

(宮下 昇)

31 馬 鹿 聾

三十近くになっても嫁さんが欲しいて言わね息子いたけど。何と困ったていうんだな、嫁もらい。

ちようど川向いのおばさんがいた。そのおばさんが来て、強引に仲人した。

「あの娘は無傷者だから、お前さんなど余るような、もったいない娘だから、ほいっもらえ」

と、むりやりにもらわせられた。してはあ、御祝儀も簡単ながら、すましてだ

な、いよいよそこさ嫁が入ったわけだ。なんぼ晩経^たってもうんともツンとも来ないというのだな。息子がな、嫁もやきもきしてしまつたて。

「なんだて、おかしい人なもんだ。こいつ見せたら、いくらか気分出すでないか」

て、ある朝、御飯どきに起きて行くとき、先に起きていたら、コカラコカラて見っだから、ちようど鼻先さグラリまくつて本物見せだつて。ところが奴さん、ぶつたまげた。「おつ」て言うだけあ、もつくら起きて仕事着一枚引っかけてとび出ってしまった。

「何だて、どこさ行つたんだかな」

て思つて、ところが川向いのおばさんどこさ行つた。おばさん朝起きて、竈さ火焚きつけてプープーしていたら、「おば、おば」て、怒鳴り込んだというのだ。

「何だ、今ごろ」「おばのテンツ野郎」「何だごんだ」

「何だごんだも、かんだごんだもあるもんでない。無傷者だからもらえもらえて言うからもらつたら、あの古傷、あんな古傷持つた者、無傷者だなて、よく言う

たな」

お婆も何だか分かんねて言うんだな。

「何か間違ったことでもしたんでないかなあ。何なごんだ」

「何なごんだも、かになごんだもあるもんでない。とにかく行つて見て呉ろ」

「行かねど分かんねか」

「分かんねから言うてんなだ。とにかく今すぐ」

「仕様ないもんだ。ほんじゃまず行つてみつから、誰それ起きて御飯の火見てろ。

何を語つていんなだか、今すぐ来いなんていうから行つてみつから、ちよつくら見てろ」

ほして出かけたていうんだ。ぐるっと廻つて橋があるんだげんど、川漕いんだ。

「何だ、川漕いだりして」

「橋なて廻つていられっか」

ほうしてダボダボと川漕いで行つちまった。かなり水深かったから、仕方ないからお婆も尻、グラリまくつて、その後から漕いで行つた。奴さん向かい側に行つ

て見っただけあ、おばのどこ、ようつく見てて、

「何だ、おば、おばも古傷あんな」

「なに」

「おばも大した古傷だ」

「何したもん、ははあ、この野郎、これ言うてるんだな、ああ、そうか来い来い、こつちや」

そしてその向い側の萱やぶの陰さ引っぱってて、

「この古傷はこうするもんだ」

て、その使用法教えた。

「家さ帰ったら、嫁もらったら毎晩こういうことするもんだ」

て教えて、おば帰って行つたてだな。まだダブダブと川漕いで行ってしまったのだ。

「何だて、ひどいヤバチイことするおばだ」

と思つて、ちよつと股倉見たら、今まで皮スポンとかぶっていたな、皮がなく

なっていたていうなだな。奴さん、ぶったまげてしまったんだな。

「おば、おば」「何だ」「おば、おれの皮盗んで行つた、んねが」「なに」

「おば、おれの皮盗んだべ」

「盗んでなの来ね、そこらさ落ちつだから探ねてみる」

て、おば振り向きもしねで行つてしまった。奴さん、萱株の陰あつちこつち探したら、うっかりカメ蜂巢食つていたカメ蜂の巢ふんづけた。うわあと、カメ蜂出たから、これあ大変だ。こんどは皮どこでない。口笛吹いて、シーシと逃げたというんだ。こんど大丈夫だと思つて、そこでちよいと見たれば、皮かぶつていだつて言うんだ。

「おば、あつたあつた。カメ蜂あ盗んでいだんだつた」
て言うたど。

(宮下 昇)

32 屁 た れ 嫁

むかしあつたけど。

風呂敷包み一つ背負った若い娘が来た。そして、その娘を泊めだんだど。したらとてもよく働く。その家で、嫁こ一人欲しいと思つていたもんだから、

「おらえの嫁になってくんねが」

て、頼んだげんど、

「おれ、とても嫁にならんね」

て辞退するんだって。

「いや、そんなこと言わないで、お前のようなええ娘、欲しいと思つていたんだから、嫁こになって呉れ」

て、そうして、

「ほんじゃ、いでみんな」

て置いだんだど。ところが毎日毎日一生懸命に働いて言うことないげんども、

だんだん顔色がわるくなって行く。

「何だお前、どっか悪いのか、どこか病氣でも持ってんでないか」

て、親だち聞いたんだ。したら、

「どこも悪くないんだ、何でもない」て言うげんども、それでもだんだん顔色わるくなって来るし、心配して聞いたたら、

「実は、おれには病氣があるんだ」

「何病氣なごんだ」

「人に言わない病氣だ」

「そんなこと隠しておくことないから、何にもさしつかえないから、正直に言うてみる」

「実はおれが、屁が出る病氣なごんだ。そして屁こらえているために、何だか体が具合わるくなつたんだ」

「ああ、そんなこと安いごんだ。かまわず屁などお前出るほどたれろ」
て言われたって。

「ほだたて、そんなこと言われたて、おれたれられそうにない」

「いやいや、そんなことないから、思い切り腹いっぱいたってみろ」

「ええがんべがつす」

「ああ、ええどこでない」

「ほんじゃ、おどつつあまもおつかさまも、炉櫓さつかまつておくやい」

「そんな、何屁たっじやて、炉櫓おさえつことあんめえ」

「いやいや、そうでないから、どうか一つ、ぎっしりとつかまつておくやい」

「んじゃ、こうすっどええか、んじゃ、たっでみろ」

て、炉櫓さぎっしりと両手かけてだ。ほうしたら嫁さん、尻こっちさ向けてたけざあ、ソロソロと尻たぐつてたれた。ブーウと出っど、なるほど大きい屁だていうんだ。そこらのもの吹つとび出した。ほうしているうちにグラングラン、グランとそこら動き始めた。そうこうしているうちに、どんどん、どんどんその屁あ強くなつて来た。そうしたところあ、雨戸はずつでとんで行った。ガラガラ、バーンととんで行く。ヤカンから何から、みなとび始めた。親父とかかは、やしやな

がつて、「屁の口とめろ、屁の口とめろ」て言うげんども、たれ始めたらしまるもんでない。そうしている、炉稼がらみ、おどつつあまとおつかさま吹つとばさつでしまった。空までとんでしまった。

「こがえな嫁、置かれるもんでない」

そして早速おはらい箱になつてしまった。

「ほだから、おれ、たんねて言うに、たれろたれろていう。んだげんど仕方ない」
どさか行くより他ないて風呂敷包みもつて来たな背負つて出かけた。ほうしてずうつと行つたら、子どもら、峠さ掛つたら、わんわん騒いでいた。

「何しつた」

て言うたら、

「梨いっぱいなつてだところが、梨の木あ太つとくて、高くて、何とも振ぐべざあ
ない」

石など投つてやつけんども、たまに当たつて落つて来つけんども、取らんねくて困つてた。

「ああ、そんなもの、おれ振いでくれんべ」

「なじよして振ぐ」

て言うたら、

「屁でもいでやる」

「何を言うてやつか。屁でこの梨もげるもんでない」

て言うたら、

「ええが、お前方待つてろ」

て、ちいと小高いどこさ上がって、尻ひったぐっていたけあ、たれだ。それこそ出だ。ブウ、ブウ、ブーウ、ブウ。たれたところが梨の木あガサガサ根っこから根もくじりになるくらいゆすつだ。落ちた落ちた。野郎どもの頭さばらばら、頭こぶ出るやら大騒ぎになった。みな逃げて行ってしまった。そうして一つもなく皆落ちてしまった。そうして娘はみ落して、さっさと行ってしまった。そうすつど野郎ども集まって来て、

「いや、ええがった、みな振いでもらつた。食いたてらんね、まず一つ大きなか

ら」

拾つて嚙つてみた。いや屁くさいの屁くさいの、食^かつじやもんでない。

「いや、これも屁くさい」

どいつもこいつも屁くさくて、一つも食れんなかった。そうして、

「あの女、ひどいことしてしまった」

なて言うたげんど、どこさか行つてしまったから、何とも仕様ない。とうとう

梨一つも食んねがったど。どろびん。

(宮下 昇)

33 倒れ剥^はぎ右エ門

大工だか、山道通つたところが、侍が倒つていたていうんだ、死んで。そうすつど「よし」て言うもんで大工箱おいて、その侍の服装みな剥^はがして、侍なつたど

こだも。刀さして、そして殿さまの娘簪になれて、大工も口はええがったか何
だか、娘簪にしたくてはあ。

ところが何も能なしだからだげんども、何さ向けてやつてもええあんばいに
やつて来るもんだから、殿さま、ますます氣に入りではあ、娘はやんだくて仕様
ないげんども、簪にさんなねて言うどこだけな。

そしてこんどは、何処にか悪い者いっぱいいたから、それ退治に、先立させて
やったどこだけな。そしたところあ、娘が、それ殺したくてはあ、簪にすんな剥
ぎ右エ門嫌^やんだくてはあ、重箱さ毒入^いつだ「寿司」こさえてあずけてやったどこ
だけど。そうしたところが、悪者来^きつどこさそれ開けてはあ、やった。そうすつ
ど「こりや」^{いきお}と思つて悪者食^くつたら、みな悪者あ死んでしまつてはあ、そうすつ
ど自分が大勢^いいで帰^{かへ}つて来たわけだ。そうすつどますます殿さまのお氣に入りで
はあ、とてもとてもええごんだけなあ。どろびん三助。

(鈴木ともよ)

34 わざわい

殿さまの息子が我俣息子だったど。それが我俣で我俣で仕様なかったから、あまり我俣だと「わざわざ」ざあ来るもんだから、我俣ざあさんねもんだと、よく教えらったど。ほうしたところが、

「わざわざいざあ、なじよなもんだか見たい」

て言うもんで、これあ頑張るもんだから、「そのわざわざ捕えて来い」て言わつて、その家来が山さ行ったごんだど。そうしたところが、どういう人だったべ、

「ほんじゃ、わざわざい見せつから、あえべ」

て言うもんで行ったところが、何拍子ええがったが、

「わざわざい見たけりや、深山さござれ」

て、やんやん語っていっどこ耳さ入ったどこだど。ほうして、

「はてな、何だべ」

て、だんだん奥山さ行ってみたところが、そこさ大した大きな獣物けだものあ出できた

ていうたなあ、そして首き縄つけて、わざわい連^せて来たてだな。そうしたところが恐かないわざわいだつたど。

んだから我俣さんね、どろびん。

(鈴木ともよ)

35 梅

干

大事に犬飼ってだ。女犬だ。その犬つれて山さ稼ぎに行つた。そして坂道トントン、トントン登って行く時、その大將は年若がったもんだから、犬のペペコ見て、気分が出てきて、山へ行つて犬さはめてみた。何としても取れなくなつた。困つて困つて仕方なくて、和尚さまさ行つて聞いてみんべと思つて犬抱いて山から帰つて来た。和尚さまはまた若い和尚で、一人ものだったから、孔何かないかと思つているうちに、太い火吹竹あつた。そいつ嵌めてしまった。取んねぐなつ

た。さあ大変だ。棒なんぼ引張っても火吹竹とんねぐなつた。

そうして困つて炉端にあぐらかいて、火吹竹かかえていた。そこさ犬を抱えて若者が行つたて言うなだ。

「実は和尚さま、本当に恥ずかしい次第だげども、これこれとれなくなつてしまつた」

と。和尚さま、

「おれも、火吹竹取んねぐなつた」

なて言いだくから、

「それあ困つた。すっぱいもの食つてみつどちちんで行く。そうしたれば取れつかも知らないから、流しのカメの中に梅漬けつたなあつから、そいつ食つてみる」
て言うた。ところが和尚さま火吹竹邪魔になつて、大きな石上げつだもんだから、なかなか石取除けらんね。若者は若い者で、犬だつこしてつから取らんね。そこに女中一人いた。女中、

「お梅、お前、この石とつて梅漬出してみる」

そのお梅なる者は芋洗いしつた。長味くつた芋の格好のいいものあつたもんだから、これまたその芋をいたずらして押込んでやったら、その芋取んねぐなつた。んだげんども芋は見えねもんだしな、仕方ないもんだから、ヒヨコヒヨコと来て、梅漬のお重^{もし}を取ろうとしたげんど、いや大きな石で持ち上げらんねていうんだ。そして「ドッコイショ」とふんばつて、力んで持ち上げたら、その力んだ力で芋抜けて行つた。そして流しの隅こきストーンと抜けて行つたら、大事に飼つてた猫はネズミと間違えた。そしてその芋さ飛びついた。そうすつどこんど、その猫見つけて、犬が猫さ噛みついた。スポンと抜けて行つた。さあ大事な猫、犬に噛まれつどわるいから、犬ひっぱだつかと思つて、ひよいと見たら前に火吹竹あつたから、そいつ思い切つてのし上げたら、スポンと抜けて行つたど。そして三人とも無事とれた。それから梅干は災難除けだということになつた。

(宮下 昇)

36 聲 と 嫁

非常に恋れた娘がいだった。ほして何とかしてある娘、かかにもraitたいと思つて考えているうちに、別な男に仲人が来て、話決まつてしまった。さあ奴（やつこ）さん困つてしまった。何とかして、あれを破談にしてやる方法はないかと思つて、いろいろ考えた末、その男どこさ、友だちでもあつたから行つた。そして、

「おいおい、お前、あそこの娘、嫁もらうつていうた、んねが。もらうええげんども、氣付けろよ。あの娘などもらつたら、振きとられつかも知んね。あの娘なの、ペペコに齒ある。うっかりしてつど、お前、ボツツリ噛み切られつかも知んね。それだけ氣付けた方ええぞ」

「本当か」「本当だ」

ほしてまず、そこ来て、こんど娘どこさ行つた。

「お前、あそこさ嫁に行くて言うた、んねが」

「ほだ、あまり好きでもないげんども、氣付けろよ、あそこの大将の道具が大き

くて、馬の道具なんていうもんでない。それこそ藁打棒か、大人の膝株よりも大きいんだ。あんなもんでやらっただら、お前一ぺん勝負に片輪になるんだぞ、それだけ気付けて行け」

て帰って来た。

そしていよいよ御祝儀になった。智さんの方も嫁さんの方もモンモンとして、その日その日送って、いよいよ今日御祝儀だていう。式も三々九度の盃事も終わって、いよいよ床入りになった。

さあ大変だ。その智さんもうすっかりすつど噛み切られっから大変だ。何とかしてこれを試してみたいもんだ。んだから一ぺん勝負に本物出してやって、うっかりやらっただら片輪になっから、まずそおと膝小僧を突出してやってみようと思つて、ソロリソロリと膝株を出してやった。こんど嫁さんの方では、その大きな物、今来つか今来つかと思つて固くして小ぶるいにふるえていた。そこさ、ヌルヌルと大きな出て来た。股さ触ったかと思つたら、びっくりして爪立ててしまつた。両方の手でがっしり抑えた。さあ、野郎は噛らっじやと思つて、たまげて飛

び上がって、ほうして出て行って、ランプの傍さ行って、よっく見たら、なるほど歯の跡が裏表からついてた。さあ大変だ。こんなもの、よくもおれさ仲人して呉っじやもんだ。これ本物やんねでええがった。膝だから助かったげんど、本物なんだったら、一ぺんに噛み切らっじや。さっそく次の日離縁してしまった。そうして破談になって、そうすつとこんどは別な男好きだったな、待ってましたて、早速申込んで嫁にもらったど。

(宮下 昇)

37 母ガニと子ガニ

子ガニが横にワサワサと這つてたのを見て、母ガニが、
「お前がなぜ横に這つて歩くんだ。なぜ真直ぐに行かないだ」と言ったら、子ガニが母ガニさ向かつて、

「お母さんが真直ぐに歩くんだら、わたしも真直ぐに歩きます」といいました。

(宮下 昇)

38 茗 荷

そばやの旦那が、

「茗荷を食うど物忘れする。んだからお客さまが忘れものして行くように、そばの薬味に茗荷出せ、ねぎでなく、茗荷刻んで出すから」

て、番頭に茗荷刻んで、いっぱいかけて、

「お客さま、金持ちなようだから、茗荷の辛味いっぱいつけて出せよ」

そして出してやって、「いや御馳走さま」て言うて、そのお客さま帰って行った。そして帰って行くより早く旦那さま出て来て、

「今のお客さま、何か忘れものして行かねが」

「何もないようだ。よく見たげんど何もない」

「ないざあない、あの位茗荷食せども、何か忘せないざあないから、財布でも忘せねか探してみろ」

て、なんぼ探しても見つけらんね。

「何もないざあ、おかしい」

「ああ、あつた、あつた」

「何忘せで行つた」て言うたら、「そば代置くの忘せでつた」

旦那がっかりしてはあ、

「ああ、こういうことするもんでない」

と。それから茗荷の辛味出さないけど。

(宮下 昇)

旅人、道に迷つて山さ踏み込んで行ったら、一軒屋あつた。そしてそこへ行つて、

「今晚一晚泊めて下さい」て言うたら一人年取つた様さまのわるい婆あさんがいた。「ええだろう。どうか泊まって行つておくやい」て言わつてそこさ泊まつた。

どんどん、どんどん囲炉裏さ大鍋かけて、そして何かゴトゴトと煮ておつた。ほしているうちに、

「おれ、隣の家まで用あつて、用達して来つから、この火絶えないように、よく見てておくやい。この鍋の蓋とつて見ないで呉ろ」

「ああ、ええどこだ、ええどこだ」

て言うて出て行つたてだ。そして待てど暮らせど歸つて来ぬ。

「あら、いつまで経たつたても歸つて来ない。この鍋も水あ煮ひるような音する。一体何を煮つたもんだらう」

と思つてそつと見てやろうと思つて鍋の蓋とつた。ところが人間の首が入つた。髪はふわふわと煮たからな、女だ。皺のないどこ見つど若いようだ。ところがよく見たら、齒が一本もない。これが本当の「はなし」ていうもんだ。

(宮下 昇)

40 果てなしむかし

むかし好きなじさまがいた。そして、

「おれさ、腹いっぱい、たくさんだつて言うまで、むかし聞かせた者に、おれの娘呉つでやる」

と云うてだところあ、その旨がその前さ来て呉^けた。立ち聞きして、

「じさま、おれ、ほんじゃ、お前のその、たくさんというほどむかし語^{かた}つて聞かせっから、んで、お前たくさんだていうたら、お前の娘呉れっか」

「ああ、呉れんどこでない」

ほう言うて、

「むかしあつたけど。ほうしたら、川端に大きな栃の木があつたけど。その栃の実あいつぱいなつて、秋、その栃が熟んだら、カラカラカラ、チャポン。ポンコポンコポンコ。川さ流れて、また次んな、カラカラカラ、チャポン。ポンコポンコ。カラカラカラ、チャポン。ポンコポンコポンコ。ほして今度あだんだんさかりになつて来たな、カラカラカラ、チャポン。ポンコポンコポンコ……」

いつまで経つても終つたてないど。「カラカラカラ、チャポン、カラカラ、チャポン」「まだか」「まだまだ、いっぱい、カラカラ、チャポン、カラカラ……」

ほうしてまずはお、じさまもたくさんなつてしまった。

「もうたくさんだ」

て言うた。そしたら、

「さあ、それではたくさんだて言うほど聞かせたから、娘呉ろ」

「そんな「むかし」では娘なあ、呉られるもんでない」

て言うたげんど、娘は、

「いやいや、約束は約束だから、おれあこの人の嫁になって行くから」

て、ほして出かけたというごんだ。ほうすつど座頭の坊喜んで、ほうして出かけたというんだな。ほうして行つて、ずうつと行つてマワタ橋のどこまで行つた。ほうしたら娘は途中から大きな石一つ、座頭知しやねうちに拾って行つた。ほして、

「おら、座頭のおかたになどなるごんだら、こつから川の中さ入つて死ぬはあ」
て言うて、一二三で橋の上から川の中さその石、ダボンと投げ込んだ。ほうしたら座頭、

「お前死ぬごんだら、おらも死ぬはあ」

て、ほこさとび込んで行つて死んでしまったど。ほうしてそこで座頭のおかみになんないで、娘は家さ帰つて来たというむかしだ。どろびん。

(宮下 昇)

41 果てなし話

山さ、みんなで遊びに行ったら穴があつた。何穴だろうて突つついたら、蛇が出てきた。逃げた。ノロノロと追つかけたり、追つかけた。早く早くていうんで、逃げてきて、家さ入って、「なんだごんだ」ておつかさん言うた。「蛇おつかけたから早く早く」「ほんじゃ、早く寄れ」て、ばちんと戸閉^たてた。ほうしたら蛇その家さ行つたげんど、入らんねから隣の家さ行つた。隣の家でも戸ばちんと閉^たててはあ、中から錠かけたから、その隣さ行つた。そして…。

それで仕樣ないもんだから、隣の部落さ行つて、そしてその蛇あ、今日もノロノロ、明日もノロノロ…。

(宮下 昇)

42 恐つかなくておかしくてあわれな話

むかしあつたけど。

向いの山から、口耳まで割つて、角出て、こんな顔した鬼あ来たど。おつかなんべ。

「うん、おつかない」

その鬼あ片方の足上げだど思つたらば、大きな屁ブーツとたつじやずも。おかしがなんべ。

「うん、おかしい」

あんまり大きい屁たつじやれば尻ぶつさけで死んだけど。あわれだべ。どろびん。

(宮下 昇)

わらべ唄

みそしよっぱい（手まり）

味噌しよっぱい味噌 泡どじよろ

あつちは丹波の白兔で

こつちはヨモギの城の跡

かつぎかつぎ行つたれば

あらものないどて 借あしやらね

腹たつな 腹たつな

それほどお腹が立つならば

紫河原さ身を捨てて

鶴は沈むし 亀は浮きるし

ずんぶこんぶと流れます 流れます

ちようど一丁 貸した

おさんのうの（手まり）

おさんのうのおさえさんまは

赤いオンベが^{だい}大おお好きで

テコチャン テコチャン

ゆうべ隣の恵比須講に招ばれて行ったら

鯛の吸物 小鯛の浜焼き

一ぱいおすすはすうすう、すう

二はいおすすはすうすう、すう

三ばい目には名主の権助さんが

お魚ないどてお腹を立てました

テコチャン テコチャン

まず一貫お渡し申します

デンツケ(手まり)

デンツケ デンツケ

お手まり 腰にしめなわ

糸ごんごんじめ

糸六六じめ 糸七七じめ

糸八八じめ 糸九十九まで

丁度一丁 かした

からす(口遊び)

からすからす こんがらす

足洗って どこさ行く

天竺の湯さ行く

腰に下げっだはなんだ

粟米 小米

おれにちいと呉ろ

呉れっど減る

減ったら作れ

作るにや冷たい

冷たいが当たれ

当っどあっつい

あっついが家さ上がれ

家さ上がっどノミあ食う

ノミあ食うが かけ

かくど痛っだい

痛いかイタチの糞つけろ

まだ痛いか馬糞まんくそつけろ

やんやん山形の（子守唄）

やんやん山形の やんべあオカタ

オボコ産^なすどてカブ産^なした

オヤジに見せねで煮て食った

オヤジ怒ってナベ投げた

炉椽^{ぶち}に当たってナベあ割れた

向いの山を（口遊び唄）

向いの山を狐が三匹通るわい

先の狐が物知らず

後の狐も物知らず

いっち中のコン狐が物知って

モチ田さ降りて モチの穂拾った

あらうまい こらうまい

いま一穗も食いたいぞ

晚げはどこさ泊りましよう

木蓮寺の木の下さ

畳を十畳敷き並べ

六枚屏風を立て並べ

黄金^{きん}の盃 手に持って

おどつつあま上がれ いえいえいえ

おかさま上がれ いえいえいえ

魚がなくて上がらんか

高い山には竹の子

低い山にはヒキの子

雑魚ざんざらめて

エビあはねてここんだ

おらがおせんは（子守唄）

おらがおせんはよいオボコ

野さも山さも寝てみたが

松葉にさされて目が覚めた

ここはどこよと問うたれば

鎌倉街道の門の下

門から続いた信濃町

信濃の土産に何もろた

雪駄五足に足袋五足

誰に呉りよとてもろて来た

おせんに呉りよとてもろて来た

おせんは居ねもの死んだもの

今日さ七日で墓詣り

墓のぐるりさ石積んで

石のぐるりさ竹植えて

竹の小枝さ鈴つけて

風の吹くたびコロコロとコロコロと

ねんねんや（子守唄）

ねんねんや おんもりや

ねんねんおんもりや

帯は七尺 黄は八丈

黄八丈の帯かつて

誰にさせるうる

おせんにささせて 遊ばせるうる

遊ばせながらも 泣きながら

ねんねんや おんもりや

ねんねんおんもりやあや

あとがき

米沢市築沢地区の民俗調査は本年の置賜民俗学会の大きな事業として、三沢公民館にお勤めの会員渡部勉氏を中心に、本会の会長江田忠氏の各方面への協力依頼によって実現した。特に公民館の館長さん、郷土誌研究会長の鈴木さん、その他研究会員のみなさんに多大のお骨折りをいただいて、多大の成果をおさめた。

昔話については特に宮下昇さんの独特な語り口は貴重な上に、若衆の伝承した昔話や「果てなし話」は大きい意味をもつ資料である。また鈴木ともよさん、赤木精作さん、遠藤富雄さんにも聞くことができた。日時不足のために十分に思い出していたく暇もなしに収集したものであるが、資料として大きい意味をもつことになると思ふ。今後期を見て知る限りの昔話をお聞きたいものと思う。

なお、口頭伝承の考察は別の機会を得て行う予定である。一先ず資料集としてここに提出するもので、話者をはじめ、御協力者に深い感謝を捧げるものである。

「わらべ唄」は全て宮下昇氏に歌っていただいたものであるが、譜をのせるこ

とが出来なかったのは残念であるが、これも別の機会を待つことにしたい。

昭和47年11月

米沢市築沢の昔話

編 者 武 田 正
南陽市三間通 232 の 3

昭和 47 年 11 月 30 日 発行

＊本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成十八年三月三十一日

山形短期大学民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

山形短期大学附属図書館内

(電話)〇三三―六八八―七五四四